

青森県埋蔵文化財調査報告書 第485集

中居林遺跡Ⅲ

— 県道八戸環状線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2010年3月

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書 第485集

中居林遺跡Ⅲ

— 県道八戸環状線道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告 —

2010年3月

青森県教育委員会



調査区全景 (E→)



沢とビット群



第3号木組遺構 (S→)



第3号木組遺構出土製品

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、平成18年度から20年度にかけて県道八戸環状線道路建設事業予定地内に所在する中居林遺跡の発掘調査を実施しました。平成18・19年度調査結果については平成19・20年度に「調査報告書」としてすでに刊行しております（青森県埋蔵文化財調査報告書 第454・470集）。平成20年度の調査では、縄文時代の竪穴住居跡・溝状土坑・木組遺構、弥生時代の竪穴住居跡、平安時代の竪穴住居跡が発見され、同時期の土器・石器が出土しました。本遺跡が、集落の変遷・遺構の土地利用等を考えるうえで、貴重な集落であることがわかりました。

八戸市には数多くの埋蔵文化財包蔵地が遺されていますが、その中には、平成21年度に国宝に指定された合掌土偶が出土した風張(1)遺跡など重要な集落遺跡が少なからず含まれています。

本報告書は、平成20年度中居林遺跡発掘調査事業の調査成果をまとめたものです。この成果が今後、埋蔵文化財の保護と研究等に広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対してご理解をいただいている青森県県土整備部道路課に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたりご指導、ご協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成22年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 新岡 嗣 浩

例 言

- 1 本書は、青森県県土整備部道路課による県道八戸環状線道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成20年度に発掘調査を実施した八戸市中居林遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は9,400㎡である。
- 2 中居林遺跡の所在地は、青森県八戸市大字中居林字中居林36-15外、青森県道番号は、203281である。
- 3 中居林遺跡の発掘調査報告書は、県道八戸環状線道路建設事業等に伴って既に2冊刊行されており、本書は第3冊目となる。
- 4 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は発掘調査を委託した青森県県土整備部道路課が負担した。
- 5 発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成20年4月23日～10月28日
整理・報告書作成期間	平成21年4月1日～平成22年3月29日
- 6 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、青森県埋蔵文化財調査センター葛城和徳文化財保護主査、澤田恭平文化財保護主事、中村隼人文化財保護主事が担当し、文末に執筆者名を記した。依頼原稿については、文頭に執筆者名を記した。
- 7 発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影	株式会社 シン技術コンサル
石器の石質鑑定	八戸市文化財審議委員 松山 力
放射性炭素年代測定	株式会社 加速器分析研究所
火山灰分析	国立大学法人 弘前大学理工学部教授 柴 正敏
木材の樹種同定	株式会社 吉田生物研究所
挽物の塗膜分析	株式会社 吉田生物研究所
炭化種実の同定	札幌国際大学博物館 客員研究員 椿坂 恭代
木製品の保存処理	株式会社 吉田生物研究所
剥片石器の実測	株式会社 シン技術コンサル
遺物の写真撮影	シルバーフォト、スタジオエイト
- 8 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 9 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品、実測図、写真等は、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 10 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の方々と機関からご協力・ご指導を得た（敬称略、五十音順）。

宇部保則 小笠原雅行 川口潤 小久保拓也 小林和彦 佐々木浩一 関根達人 永嶋豊 村木淳
- 11 本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の25,000分の1地形図を複写して使用した。
- 12 計測原点の座標地は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。

- 13 挿図中の方位は、すべて日本測地系の座標北を示している。
- 14 全体図等の縮尺は、原則として調査区位置図は1/3,500、遺構配置図は1/600に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 15 調査区については便宜上、西端をA区、沢1が検出された区域をB区、その東側でピット群が検出された区域をC区、東端をD区と呼称した。
- 16 遺構については、検出順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺構に使用した略号は、以下のとおりである。

S1-竪穴住居跡 S2-竪穴建物跡 SK-土坑 SV-溝状土坑 SD-溝跡 SP-ピット
SB-掘立柱建物跡 SE-井戸跡 SX-用途不明遺構 SN-焼土遺構

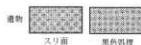
- 17 遺構内ピット等は、検出面からの深さを挿図中に括弧付き(cm)で表記している。
- 18 遺構実測図の土層断面図等には、水準点を基にした海拔標高を付した。
- 19 遺構実測図の縮尺は、原則として竪穴住居跡のカマド・炉跡等は1/30、竪穴住居跡・土坑・溝状土坑等は1/60、その他は1/60及び1/120に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 20 遺構実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。



- 21 遺物分布図で使用している記号は下記の通りである。
- 土器・陶磁器：● 石器：■ 鉄製品：▲ 木製品：★ 土製品：○ 石製品：□
- 22 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。
- 23 基本土層・遺構内堆積土層の色調表記等には、『新版標準土色帖 2004・2005年度版』（小山正忠・竹原秀雄）を使用した。
- 24 火山灰の略号は十和田a火山灰-T o - a、十和田b火山灰-T o - b、白頭山苦小牧火山灰-B - T mとした。
- 25 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付した。遺物に使用した略号は、以下のとおりである。

P-土器・陶磁器 S-石器 C-炭化材 W-木製品

- 26 遺物実測図には、挿図毎に1から通しの図番号を付した。
- 27 遺物実測図の縮尺は、原則として縄文土器・弥生土器・土師器等・土製品・礫石器・木製品等は1/3、剥片石器・鉄製品等は1/2に統一し、各挿図毎にスケール等を示した。
- 28 遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。



- 29 遺物観察表・計測表に使用した略号等については、各表毎に指示内容を示した。土製品・石器等の計測値は、長さ×幅×厚さ(mm・cm)・重さ(g)の順に表記したが、()内の数値は現存値、〈 〉は推定値である。
- 30 遺物写真には、遺物実測図と共通の図番号を付した。
- 31 遺物写真の縮尺は、原則として1/3、剥片石器は1/2に統一したが、遺物の大きさによっては任意の縮尺で掲載した。

目 次

口絵
序
例言
目次
挿図目次
写真目次

第1章 調査の概要	第7章 時期不明の遺構
第1節 調査に至るまでの経緯…………… 1	第1節 竪穴建物跡…………… 98
第2節 調査の方法…………… 2	第2節 土坑…………… 99
第3節 調査の経過…………… 4	第3節 溝跡…………… 105
第2章 遺跡周辺の地形・地質と遺跡の順序	第4節 井戸跡…………… 111
第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡…………… 7	第5節 焼土遺構…………… 111
第2節 中居林遺跡の地形と地質…………… 11	第8章 理化学的分析
第3章 縄文時代の検出遺構と出土遺物	第1節 中居林遺跡における放射性炭素年代…………… 112
第1節 竪穴住居跡…………… 15	第2節 中居林遺跡出土の植物種子…………… 116
第2節 土坑…………… 25	第3節 中居林遺跡出土木製品の樹種調査結果…………… 119
第3節 溝状土坑…………… 28	第4節 中居林遺跡の掘立柱建物跡…………… 127
第4節 木組遺構…………… 30	第5節 中居林遺跡出土漆器の塗膜構造調査…………… 132
第5節 遺構外出土遺物…………… 36	第6節 中居林遺跡の火山灰について…………… 136
第4章 弥生時代の検出遺構と出土遺物	第9章 まとめ…………… 138
第1節 竪穴住居跡…………… 48	引用・参考文献…………… 143
第2節 遺構外出土遺物…………… 50	遺構一覧表…………… 145
第5章 古代の検出遺構と出土遺物	遺物観察表…………… 147
第1節 竪穴住居跡…………… 52	写真図版…………… 157
第2節 遺構外出土遺物…………… 58	報告書抄録…………… 193
第6章 中・近世の検出遺構と出土遺物	
第1節 掘立柱建物跡・ピット…………… 59	
第2節 土坑…………… 68	
第3節 用途不明遺構…………… 70	
第4節 沢・溝跡…………… 71	
第5節 遺構外出土遺物…………… 95	

挿図目次

図 1	遺跡の位置と周辺の遺跡	7	図 41	B区掘立柱建物跡配置図	61
図 2	調査区位置図	8	図 42	C・D区掘立柱建物跡配置図	62
図 3	遺構配置図	9	図 43	B区ピット集中区	64
図 4	地形分類図	13	図 44	C区ピット集中区(1)	65
図 5	模式柱状図	13	図 45	C区ピット集中区(2)	66
図 6	基本層序	14	図 46	D区ピット集中区	67
図 7	第6号竪穴住居跡	16	図 47	中・近世の土坑・用途不明遺構	69
図 8	第7号竪穴住居跡	17	図 48	中・近世の土坑・井戸跡・ 用途不明遺構出土遺物	70
図 9	第8号竪穴住居跡	18	図 49	沢・溝跡(1)	74
図 10	第9号竪穴住居跡(1)	19	図 50	沢・溝跡(2)	75
図 11	第9号竪穴住居跡(2)	20	図 51	沢・溝跡(3)	76
図 12	第9号竪穴住居跡(3)	21	図 52	第1・2号木組遺構	77
図 13	第10号竪穴住居跡	22	図 53	杭列	78
図 14	第11号竪穴住居跡	24	図 54	沢2	79
図 15	縄文時代の土坑(1)	26	図 55	第16号溝跡・沢1出土遺物(1)	82
図 16	縄文時代の土坑(2)	27	図 56	第16号溝跡・沢1出土遺物(2)	83
図 17	縄文時代の土坑(3)・溝状土坑	28	図 57	第16号溝跡・沢1出土遺物(3)	84
図 18	縄文時代の土坑・溝状土坑出土遺物	29	図 58	第16号溝跡・沢1出土遺物(4)	85
図 19	第3号木組遺構(1)	32	図 59	第16号溝跡・沢1出土遺物(5)	87
図 20	第3号木組遺構(2)	33	図 60	第16号溝跡・沢1出土遺物(6)	88
図 21	第3号木組遺構(3)	34	図 61	第16号溝跡・沢1出土遺物(7)	89
図 22	第3号木組遺構(4)	35	図 62	第16号溝跡・沢1出土遺物(8)	91
図 23	縄文時代の遺構外出土遺物(1)	40	図 63	第16号溝跡・沢1出土遺物(9)	92
図 24	縄文時代の遺構外出土遺物(2)	41	図 64	沢2・沢頭出土遺物(1)	93
図 25	縄文時代の遺構外出土遺物(3)	42	図 65	沢2・沢頭出土遺物(2)	94
図 26	縄文時代の遺構外出土遺物(4)	43	図 66	中・近世の遺構外出土遺物(1)	96
図 27	縄文時代の遺構外出土遺物(5)	44	図 67	中・近世の遺構外出土遺物(2)	97
図 28	縄文時代の遺構外出土遺物(6)	45	図 68	第15号竪穴建物跡 A・B	98
図 29	縄文時代の遺構外出土遺物(7)	46	図 69	時期不明の土坑(1)	100
図 30	縄文時代の遺構外出土遺物(8)	47	図 70	時期不明の土坑(2)	101
図 31	第3号竪穴住居跡(1)	49	図 71	時期不明の土坑(3)	102
図 32	第3号竪穴住居跡(2)	50	図 72	時期不明の土坑(4)	103
図 33	弥生時代の遺構外出土土器	51	図 73	時期不明の土坑(5)	104
図 34	第12号竪穴住居跡	53	図 74	時期不明の溝跡(1)	108
図 35	第13号竪穴住居跡(1)	54	図 75	時期不明の溝跡(2)	109
図 36	第13号竪穴住居跡(2)	55	図 76	時期不明の溝跡(3)	110
図 37	第13号竪穴住居跡(3)	56	図 77	時期不明の溝跡(4)・井戸跡・ 焼土遺構	111
図 38	第14・17号竪穴住居跡	57			
図 39	古代の遺構外出土遺物	58			
図 40	掘立柱建物跡配置図・ピット集中区位置図	60			

写真目次

写真1	空撮(1)……………	157	写真26	時期不明の溝跡(3)……………	182
写真2	空撮(2)・基本編序……………	158	写真27	縄文時代の遺構内出土遺物(1)……………	183
写真3	作業風景……………	159	写真28	縄文時代の遺構内出土遺物(2)……………	184
写真4	縄文時代の竪穴住居跡(1)……………	160	写真29	縄文時代の遺構内出土遺物(3)・ 遺構外出土遺物(1)……………	185
写真5	縄文時代の竪穴住居跡(2)……………	161	写真30	縄文時代の遺構外出土遺物(2)……………	186
写真6	縄文時代の竪穴住居跡(3)……………	162	写真31	縄文時代の遺構外出土遺物(3)・ 弥生時代の出土遺物……………	187
写真7	縄文時代の土坑(1)……………	163	写真32	古代・中・近世の出土遺物・第16号溝跡・ 沢1出土遺物(1)……………	188
写真8	縄文時代の土坑(2)……………	164	写真33	第16号溝跡・沢1出土遺物(2)……………	189
写真9	縄文時代の土坑(3)・溝状土坑……………	165	写真34	第16号溝跡・沢1出土遺物(3)……………	190
写真10	木組遺構……………	166	写真35	第16号溝跡・沢1出土遺物(4)・ 沢2沢頭出土遺物(1)……………	191
写真11	弥生時代の竪穴住居跡……………	167	写真36	沢2沢頭出土遺物(2)・ 中・近世の遺構外出土遺物……………	192
写真12	平安時代の竪穴住居跡(1)……………	168			
写真13	平安時代の竪穴住居跡(2)……………	169			
写真14	平安時代の竪穴住居跡(3)……………	170			
写真15	沢(1)……………	171			
写真16	沢(2)……………	172			
写真17	中・近世の溝跡……………	173			
写真18	中・近世の遺構・時期不明の竪穴建物跡・ 土坑(1)……………	174			
写真19	時期不明の土坑(2)……………	175			
写真20	時期不明の土坑(3)……………	176			
写真21	時期不明の土坑(4)……………	177			
写真22	時期不明の土坑(5)……………	178			
写真23	時期不明の土坑(6)……………	179			
写真24	時期不明の溝跡(1)……………	180			
写真25	時期不明の溝跡(2)……………	181			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至るまでの経緯

県道八戸環状線道路建設事業の実施計画に伴い、事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて、平成13年度に青森県県土整備部道路課（現三八地域県民局地域整備部道路整備課）と青森県教育庁文化財保護課が協議し、平成13年9月に県文化財保護課が確認調査を実施した。調査の結果、長久保(2)遺跡を含めて4遺跡が新規登録された。平成14年に県埋蔵文化財調査センターが長久保(2)遺跡(4月～7月)・糠塚小沢遺跡(9月～10月)の発掘調査を行った。

中居林遺跡は、平成14年度に青森県教育委員会の文化財ハトロール事業により遺物の散布が確認され、平成15年2月に新規登録された。

平成18年に用地買収の進捗に伴い、県埋蔵文化財調査センターが同年6月13日から同年8月4日の調査期間に長久保(2)遺跡の本格発掘調査と中居林遺跡の確認調査を行った。調査結果を踏まえて、三八地域県民局地域整備部道路整備課・県文化財保護課が協議した結果、3遺跡の追加調査を平成19年度に県埋蔵文化財調査センターが担当して行うこととなった。平成18年10月には、三八地域県民局地域整備部道路整備課・県文化財保護課・県埋蔵文化財調査センターが調査予定地の現地確認を行った。平成18年度(第一次発掘調査)に実施した調査の結果は、青森県教育委員会発行の青森県埋蔵文化財調査報告第454集に報告されている。

なお、中居林遺跡に係る土木工事等のための発掘に関する通知は、平成18年10月に三八地域県民局地域整備部長名で提出され、同年12月に文化財保護課から当該発掘前における埋蔵文化財の記録の作成を目的とする発掘調査の実施が指示された。

平成19年4月に現地で、発掘調査に先立って最終的な打ち合わせを行った。平成19年の4月24日から同年10月30日まで第二次調査が行われた。平成19年10月に事業者と調査精査部分について協議をおこない、平成20年度に引きつづき調査を行うこととなった。平成19年度の調査結果は、青森県教育委員会発行の青森県埋蔵文化財調査報告書第470集に報告されている。

平成20年の調査に先立って、三八地域県民局地域整備部道路整備課・県文化財保護課・県埋蔵文化財調査センターで調査地点の確認など最終的な打ち合わせを3月に実施した。なお、プレハブ設置場所について4月に打ち合わせを行った。

(成田)



第2節 調査の方法

(1) 発掘作業の方法

平成18・19年度に青森県埋蔵文化財調査センターが実施した確認調査及び本発掘調査により、縄文時代、弥生時代の遺物包含層と遺構（竪穴住居跡等）及び古代の遺構（カマド等）が確認されているため、縄文時代、弥生時代及び古代の遺構調査に重点を置いて、各集落の時期・構造等を把握できるような調査方法を採用した。

〔測量基準点・水準点の設置・グリッド設定〕

調査対象区域内に標準の座標と標高を備えた20m間隔の実測基準点（方位に合わせた1辺20mの方眼点）を設置し、これを基準として4m×4mのグリッドを設定した。各グリッドは、西から東にアルファベット、南から北に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせで呼称した。実測基準点となったグリッドの国土座標（旧日本測地系）は、AX-11グリッドがX=54140.000・Y=56392.000、BE-36グリッドがX=54240.000・Y=56416.000、CF-31グリッドがX=54220.000・Y=56520.000等である。基準点及びレベル原点には、前年度調査で設置したT-2（日本測地系でX=54217.970・Y=56363.377・Z=75.844）、T-3（同X=54218.875・Y=56385.070・Z=71.352）、T-4（同X=54215.135・Y=56409.264・Z=61.068）を使用した。

〔基本層序〕

遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付けて呼称したが、平成18・19年度の調査時の土層番号とは異なる部分がある。

〔表土等の調査〕

平成18・19年度の調査により、表土から古代の遺構確認面までは遺物が希薄であることが分かったので、重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜地区単位で層位毎に取り上げた。

〔遺構の調査〕

検出遺構には、原則として確認順に種類別の番号を付けて精査した。なお番号は、前年度調査から継続して使用した。堆積土層観察用のセクションベルトは、遺構の形態、大きさ等に応じて、基本的には4分割又は2分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本層序と区別した。遺構の平面図は、主に（株）アイシン精機製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や竪穴住居跡に伴う炉・カマド等の平面図、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量等で縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位・遺構内地区単位で層位毎に又は堆積土層一括で取り上げたが、床面（底面）や炉・カマドの出土遺物については、トータルステーションや簡易遣り方測量により、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。

〔遺物包含層の調査〕

上層から層位毎に人力で掘削した。遺物が密集して出土した区域では、トータルステーションや簡易遣り方測量により、縮尺1/20・1/10のドットマップや形状実測図を作成したが、遺物が散発的に出土した区域では、原則としてグリッド単位で層位毎に取り上げた。

〔写真撮影〕

写真撮影には、原則として35mmモノクローム、35mmカラーリバーサルの各フィルム及び800万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状況、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、業者に委託して、ラジコンヘリによる遺構及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。

(2) 整理・報告書作成作業の方法

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡6軒、土坑25基、古代の竪穴住居跡4軒等の遺構が検出され、縄文時代の土器・石器、古代の土器等の遺物が段ボール箱70箱出土した。縄文時代と古代及び中世から近世にかけての集落の時期・構造等を解明するため、竪穴住居跡をはじめとする各遺構の構築時期と集落の変遷、遺物包含層の形成過程等の検討に重点を置いて整理・報告書作成作業を進めた。

〔図面類の整理〕

遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したもので、整理作業ではこれを原則として縮尺1/20で図化し、簡易遺方測量で作成した堆積土層断面図や炉・カマド等の付属施設の実測図等との図面調整を行った。また、遺構台帳・遺構一覧表等を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。

〔写真類の整理〕

35mmモノクロームフィルムは撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは35mmカラーリバーサルフィルムと同様に整理してタイトルを付けた。

〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕

縄文時代の遺構内出土遺物及び包含層出土遺物を優先的に洗浄し、接合・復元作業を早期に進めるようにした。遺物の注記は、調査年度、遺跡名、出土地区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記したが、剥片石器・金属器等、直接注記できないものは、収納したポリ袋に注記した。接合・復元にあたっては、同一個体の出土地点・出土層位等の整理を怠らないようにした。

〔報告書掲載遺物の選別〕

遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構に伴って使用・廃棄（放置）された資料、遺構の構築・廃絶時期等を示す資料、遺存状態が良く同類の中で代表的な資料、所属時代（時期）・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。

〔遺物の観察・図化〕

充分観察した上で、遺物の特徴を適切に分かり易く表現するように図化した。特に、縄文土器の復元個体については、(拓本を使用せず)すべて実測図を作成するようにした。また、遺物台帳・観察表・計測表等を作成した。

〔遺物の写真撮影〕

業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。

〔理化学的分析〕

遺構の年代を推定するために放射性炭素年代測定、木組遺構を構成する木材及び出土木製品の樹種を明らかにするために樹種同定、そして挽物に塗布された塗膜の成分を解明するために塗膜構造分析等を行った。

〔遺構・遺物のトレース・版下作成〕

遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、手作業と（株）アイシン精機製「遺構実測支援システム」を用いたデジタルトレースを併用した。実測図版・写真図版等の版下作成は、基本的に手作業で行った。遺構内出土遺物のうち、床面（底面）出土遺物や竪穴住居跡の炉・カマド出土遺物等については、原則として遺構の平面図にそのドットマップ・形状実測図等を掲載した。

〔遺構の検討・分類・整理〕

各遺構毎に種類・構造の特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等に関するデータを整理し、構築時期や同時性・性格等について検討を加えた。

〔遺物の検討・分類・整理〕

遺物を時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・品種構成・個体数等について検討した。

〔調査成果の検討〕

遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代と古代及び中世から近世にかけての集落の時期・構造・変遷等について検討・整理した。

第3節 調査の経過

(1) 発掘作業の経過

平成20年度の中居林道跡発掘調査は、調査委託者の要望に応じて、調査対象面積9,400m²を対象として（図2）、4月23日から10月28日までの発掘作業期間で実施することになった。平成18・19年度に青森県埋蔵文化財調査センターが行った確認及び本発掘調査の結果、縄文・弥生時代の遺物包含層・遺構及び古代の遺構が確認されていたので、表土から順次掘り下げて、古代の遺構検出・調査、縄文時代の遺物包含層の調査、縄文時代の遺構検出・調査の順に発掘作業を進めることにした。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター		
	所長	伊藤 博文	(現青森県総合社会教育センター所長)
	次長(調査第一GL)	工藤 大	
	総務GL	櫻庭 孝雄	(平成21年3月退職)
	文化財保護主査	葛城 和徳	(発掘調査担当者)
	文化財保護主事	澤田 恭平	(発掘調査担当者)
	調査補助員	新山 美樹	(平成21年3月退職)
		中村 華人	(現文化財保護主事) 三浦 あすか

専門的事項に関する指導・助言

調査指導員	村越 潔	国立大学法人 弘前大学名誉教授(考古学)
調査員	佐々木 辰雄	青森県立八戸南高等学校教諭(地質学)

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成20年度]

- 4月下旬 調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置、駐車場の整備等、事前の準備作業を行った。
- 4月23日 発掘器材等を現地へ搬入し、環境整備を行った。その後、調査区域の各所に集積されていた枯れ草・雑木などを一ヶ所に集積した。
- 5月上旬 調査区全面に試掘トレンチを設定し、基本層序及び遺構・遺物の有無などを確認した。その結果、調査区西側の斜面上方では縄文時代の遺物包含層が良好に堆積していること、調査区東側の斜面下方では包含層が削平などで失われていることが判明した。その後、グリッド設定と並行して調査区南西側の斜面上部から表土の除去を開始した。
- 5月下旬 調査区南西側約1,100mの遺構検出を行い、弥生時代の堅穴住居跡・時期不明の土坑等を確認した。なお、調査区南西側の約2,300mについては道路工事の工程上、6月中に調査を終了し、引き渡すこととなった。このため、引き渡し区域について重機を使用して効率的に表土の除去を行い、検出された遺構の精査を行った。また、調査区内の砂塵が飛散するのを防ぐため、防塵ネットを設置した。
- 6月下旬～ 6月27日には引き渡し予定区域の調査を終了し、引き続き調査区北西側約3,000m²の表土除去及び遺構検出作業を行った。その後、遺構精査と並行して調査区中央部の遺構検出作業を行った結果、調査区を縦断するように沢1が検出された。本区域は調査事務所移設予定地であったため、本区域の調査を最優先で行うこととした。
- 8月上旬 調査が進むにつれ、沢1の堆積土中からは縄文土器や土師器とともに、古銭や陶磁器、近世以降のものと考えられる木製品が出土した。また、沢1の北側からはビット群も検出されたが、湧水の影響もあり調査は難航した。その後、沢1の調査もほぼ終了というところで底面から木材が出土した。その周辺を精査したところ木組遺構であることが判明した。
- 8月下旬 (株)シン技術コンサルに委託して、第1回目の空中写真撮影を行った。
- 9月上旬 調査事務所を移設し、調査区西側で確認された沢の上流部(沢2)の調査を開始した。沢2は天満宮及び地下水の汲み上げ施設などによって壊されており、調査範囲は限定されたものの、堆積土中からは縄文土器、木製品などが出土した。
- 9月中旬 調査区東側の調査を開始した。本区域は表土直下が八戸火山灰層であったため、遺物はほとんど出土せず、近世以降のものである可能性が高い土坑及びビットが多数検出された。
- 10月中旬 (株)シン技術コンサルに委託して、遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を行った。その後、旧石器時代遺物の検出を目的としたトレンチを調査区内に複数設置したが、遺物は出土しなかった。
- 10月28日 全ての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。
- 11月5日 所轄の警察署に県文化財保護課から遺物発見届を提出した。

(2) 整理・報告書作成作業の経過

平成20年度の中居林遺跡発掘調査では、縄文時代の遺構が33基、古代の遺構が4基、中・近世の遺構が20基、遺物が合わせて段ボール箱70箱出土した。報告書刊行事業は平成21年度に実施することになったが、写真類の整理作業等は発掘作業終了後の平成20年11月に終了している。この他の整理・報告書作成作業は平成21年4月1日から平成22年3月29日までの期間で行った。中居林遺跡は縄文時代・弥生時代と古代から近世にかけての複合遺跡であり、検出遺構の中では土坑・ピットが多く、出土遺物の中では縄文時代後期の土器が多い点等を考慮して、これに応じた整理作業の工程を計画した。

整理・報告書作成体制は、発掘調査体制に整理作業員4名を加えたものである。

調査主体 青森県埋蔵文化財調査センター

文化財保護主査	葛城 和穂 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	澤田 恭平 (報告書作成担当者)
文化財保護主事	中村 隼人 (報告書作成担当者)
調査補助員	三浦 あすか 太田 大輔 佐井 かなえ 岩佐 良子
整理作業員等	安田 奈津季 佐々木 春美
	阿保 恵 (平成21年11月退職) 高橋 久枝

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

[平成20年度]

11月 写真類の整理作業と図面類の整理作業の一部を行った。

[平成21年度]

4月上旬～ 発掘作業で作成した図面類の整理作業と遺物の洗浄・注記作業を行った。遺構実測図・遺構データ等の整理作業は終了し、遺物は洗浄・注記作業が終了した遺構・地区から、順次接合・復元作業を進めた。併せて、遺構の検討・整理作業を開始し、遺構一覧表等を作成した。遺物洗浄・注記作業が終了し、接合・復元作業を集中的に行った。この間に、石器・土製品・石製品類の報告書掲載遺物を選別し、また、炭化材のサンプル等を整理して理化学的分析を委託した。

7月中旬 土器類の接合・復元作業が終了したので、報告書掲載遺物の選別作業を行った。さらに、遺物の検討・分類・整理作業を進め、遺物観察表等の作成を開始した。

8月中旬～ 選別した報告書掲載遺物の実測・拓本等の図化作業を進めた。併せて遺物台帳を作成した。また、遺構実測図や遺構配置図・調査区域図等のトレースを行った。

12月下旬 図化作業が終了した遺物から、順次トレースを行った。トレースが終了した遺構・遺物については、印刷用の版下を作成した。この間に、シルバーフォト・スタジオエイトに委託して報告書掲載遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。また、調査成果を総合的に検討して、報告書の原稿作成を開始した。

原稿・版下等が揃ったので、報告書の割付・編集を行い、印刷業者を入札・選定して入稿した。

3月29日 3回の校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

第2章 遺跡周辺の地形・地質と遺跡の層序

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

中居林遺跡は八戸市中心部から南へ約2km、標高約45～60mの丘陵上に位置する。遺跡の立地する丘陵は、東側を流れる新井田川、西側を流れる土橋川に挟まれており、北側に舌状に張り出している。調査区はその丘陵の東向き斜面部にあたる。現況は宅地、耕作地、山林であった。

周辺には、いずれも国史跡である縄文時代の是川遺跡や中世の根城跡をはじめ、旧石器時代のナイフ形石器が多量に出土した田向冷水遺跡など重要な遺跡が多く所在している。また、当該事業の路線内においても、長久保(2)遺跡、糠塚小沢遺跡などが調査されている。なお、これらの遺跡の概要については既往の報告書に詳しいので、そちらを参照されたい。(葛城)

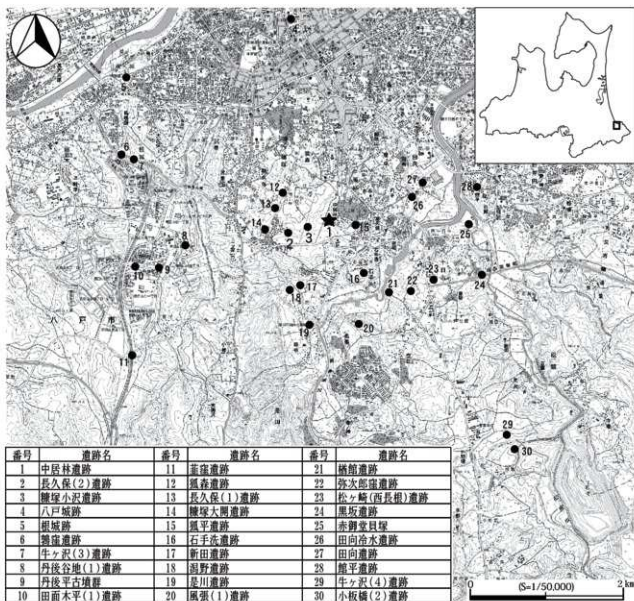


図1 遺跡の位置と周辺の遺跡

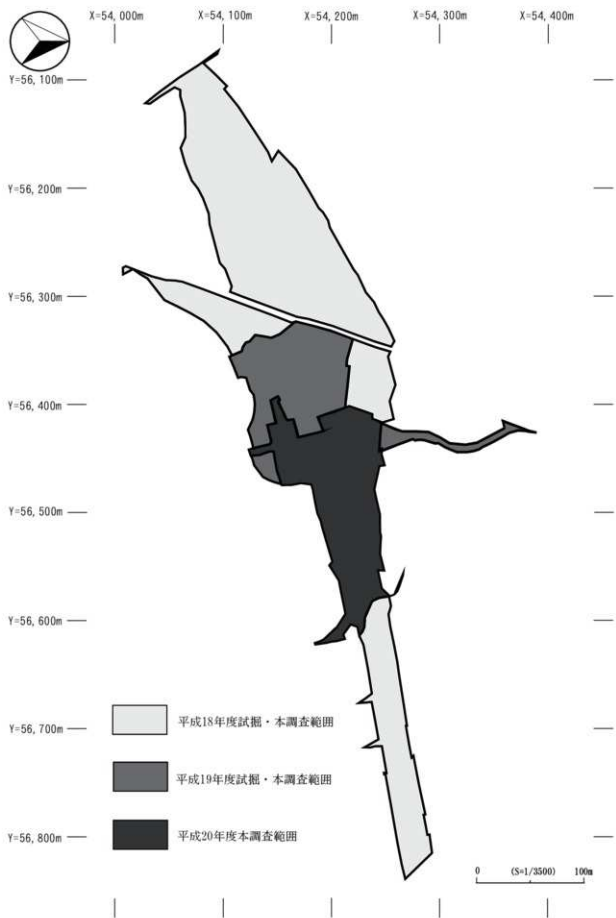
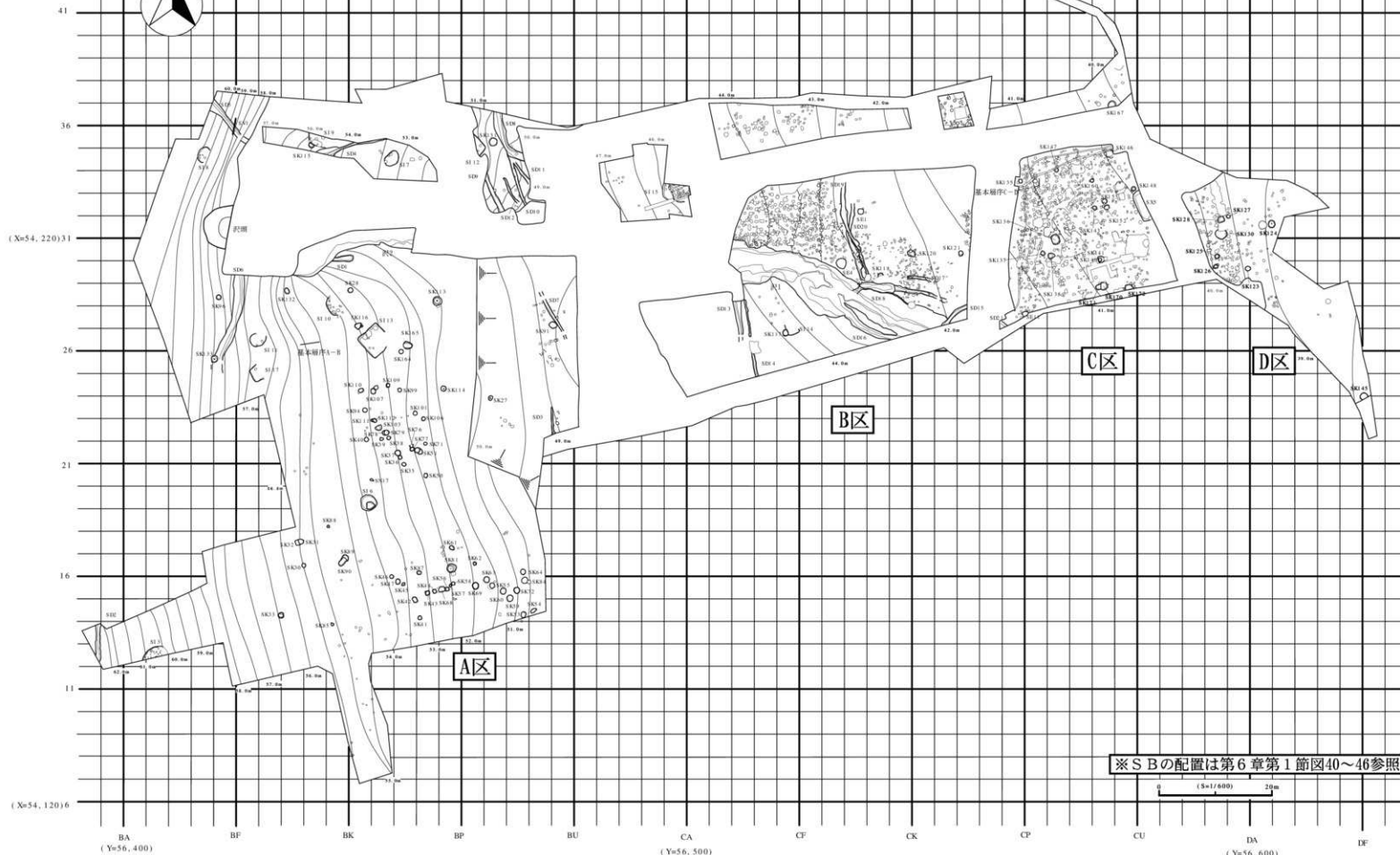


図2 調査区位置図



※S Bの配置は第6章第1節図40～46参照

図3 遺構配置図
- 9・10 -

第2節 中居林遺跡の地形と地質

青森県立八戸南高等学校 佐々木辰雄

地形

青森県南東部は、西には奥羽山脈の山々が南北に連なり、南は北上山地の北端となっている。これらの山地から、北東へ海岸段丘の発達した台地が開けている地域である。山地からはいくつかの河川が台地を浸食しながら太平洋へと注ぎ、その流域には河岸段丘地形や三角州、そして狭いながらも沖積平野もみられる。

この地域の南端には新井田川が、そしてそのすぐ北に馬淵川が流れているが、いずれも岩手県にその源を発し、北流して青森県に入るとその流路を、それぞれ北北東と北東に変え八戸港へと流入している。この地域の両河川に挟まれた台地の幅は、最下流域では約4kmと狭くなっており、両河川の河口は、現在は馬淵川に放水流路が作られて離れてはいるものの、以前は河口付近で合流して八戸港へと注いでいた。

八戸港からは海岸線が、南東には種差海岸に代表される岩石海岸がその景観を呈し、北には砂浜海岸が湖沼・砂丘を伴い、下北半島へと延びている。

新井田川と馬淵川に挟まれた台地は、南西の名久井岳山麓から北東に先細りになりながら20kmほど延びている。南西端では台地の幅が約15kmであるが、北東端では前述のように4kmほどに狭くなっている。さらにこの台地の先端部では、そのほぼ中央を馬淵川の支流である土橋川が南北に縦断している。八戸市の市街地はこの北東端にその発祥をみている。

台地には海岸段丘や河岸段丘が発達しており、最高位の蒼前平段丘は、蒼前平高位段丘（標高130～150m）と蒼前平低位段丘（標高120～140m）に、高位の天狗岱段丘は、白銀平段丘（標高80～100m）と、野場段丘（標高50～70m）に、さらに、中位の高館段丘（標高20～40m）、低位の根城段丘（5～30m）、最低位の田面木段丘（標高6～10m）に分類されている。

最高位、高位、中位の段丘は海岸段丘で、低位の根城段丘と最低位の田面木段丘は河岸段丘であり、これらの河岸段丘は馬淵川と新井田川の両岸及び河口周辺によく発達している。

蒼前平高位段丘は、南の階上岳北麓から西の名久井岳東麓にかけての山地の縁をとりまき、さらに南西から北東への台地の中央軸として延び、馬淵川水系と新井田川水系の分水嶺となっている。

蒼前平低位段丘は蒼前平高位段丘をとりまくように分布するが、いずれも大小の河川により開析されており、段丘面は丸みを帯び、明瞭な平坦面は少ない。

さらにそれらをとりまくように、白銀平段丘、野場段丘が分布している。これらの段丘の平坦面は比較的よく保存されている。

高館段丘はこの地域の海岸に沿って平行に発達しており、平坦面も大変よく残すが、馬淵川と新井田川に挟まれた台地の先端部は、両河川の河口近くとなるため、海岸段丘と河岸段丘がともに発達しており、段丘崖も緩やかであるため、この地域での高館段丘の発達は海岸に沿った地域ほど明瞭ではない。

根城段丘と田面木段丘は馬淵川とその支流の如來堂川や、新井田川とその支流の頃巻川などの兩岸に島状に分布している。馬淵川と新井田川に挟まれた台地の最北東端では、他の流域に比べて根城段丘の発達が比較的顕著である。

馬淵川と新井田川の河口周辺は三角州堆積物に覆われており、各河川沿いには沖積低地の堆積物が分布する。

中居林道跡は、馬淵川支流の土橋川と新井田川に挟まれた台地の先端部にある。新井田川左岸にある是川遺跡の北約1.5kmの地点で、八戸市街地の南端にあたる。そこは、平坦面から北に緩やかに傾斜する斜面で、高館段丘と根城段丘の段丘崖の斜面とみることができ、この斜面は、北に下るいくつかの小さな沢により浸食を受けているが、比較的なだらかな斜面である。

地質

本地域の地質を概観すると、新井田川以東から種差海岸までの地域の基盤は、先第三系の石灰岩・チャート・砂岩・粘板岩などで、海岸には玄武岩と、玄武岩質の凝灰岩が分布しており、付加体特有の複雑な地質構造をもっている。

新井田川と馬淵川に挟まれた台地の基盤は、中新統の安山岩と、安山岩質の凝灰岩や溶結凝灰岩からなっている。

馬淵川以北の基盤は、西部では鮮新統の凝灰質砂岩や凝灰質泥岩で、東部の海岸近くでは更新統の礫岩や砂岩であり、これらの地層はほぼ水平な構造を持っている。

こうした基盤を、十和田火山起源の更新世の火山灰が全城を覆っており、さらに、その上は完新世の火山灰の薄層を数枚挟む黒色土壌が覆っている。

中居林道跡では、表層の黒色土から十和田起源の火山灰層の上位にあたる八戸火山灰層まで、Ⅰ層からⅩⅡ層に分けた。

Ⅰ層は黒色の耕作土で、粘板岩や安山岩の岩片を含み、その長径は最大で2cmである。また炭化物や微細な軽石を少量含んでいる。

Ⅱ層も黒色土で、十和田b火山灰層の小さな軽石をごく少量と、細粒の中振軽石をブロック状に少量含んでいる。

Ⅲa層は中振軽石をまんべんなく含んでおり、そのため黒褐色とやや褐色を帯びる層である。長径1cmほどの南部軽石とみられる黄褐色の軽石を少量含む。

Ⅲb層も中振軽石を含むがその割合はⅢa層より少なく、色調も黒色が勝る。長径1cmほどの南部軽石とみられる黄褐色の軽石のほうは、Ⅲa層よりやや多い。

Ⅳa層は、長径1cmほどの南部軽石の黄褐色軽石を、まばらではあるがまんべんなく含む黒色土層である。南部軽石の二次堆積層とみることができる。

Ⅳb層はⅣa層と同様の黒色土層であるが、含まれる南部軽石の量は少なく、地層の延びもなく、レンズ状の産状を呈する。

Ⅴ層は暗褐色土で、含まれる黄褐色軽石は小さく少ない。やや粘性がある粘土質で、上下の層の漸移層である。

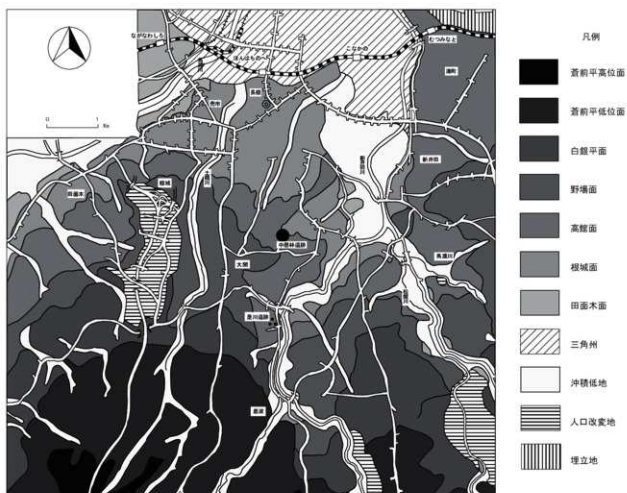


図4 地形分類図

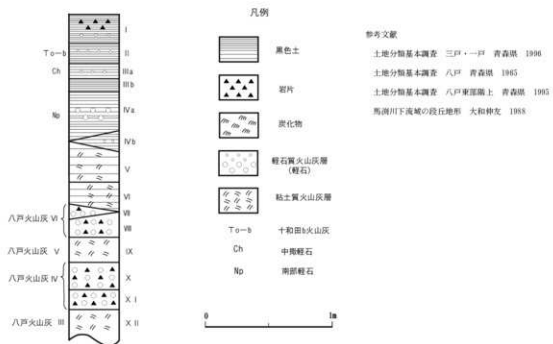


図5 模式柱状図

VI層は黄褐色の粘土質土層で、黒色で長径1mmほどの岩片を多く含む他、同程度の赤紫色の岩片も少量含んでいる。V層と同様に漸移層である。

VII層は黄褐色で長径2cmの軽石の密集層で、八戸火山灰層の最上部の軽石層（八戸火山灰層のVI層）で、VIII層と色調が異なるのは、風化帯もしくは二次堆積のためと考えられる。層の伸びもなく、レンズ状に分布する。長径5mmの黒色岩片を多量に含んでいる。

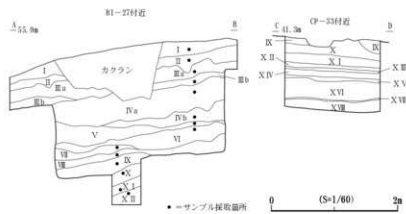
VIII層は明黄褐色軽石質火山灰層で、長径1cmの軽石が密集しており、VII層と同様に、長径5mmの黒色岩片を多量に含んでいる。VII・VIII層とも八戸火山灰層のVI層である。

IX層は明黄褐色ローム質火山灰層で、長径1mmの白色軽石や同程度の黒色岩片を含んでおり、グラスシーな感じの強い火山灰層である。八戸火山灰層のV層にあたる。

X層もIX層と同様のローム質火山灰層であるが、にぶい黄色を帯びる。やや色調を異にするが、IX層とX層はともに八戸火山灰層のV層である。

XI層はにぶい黄色軽石質火山灰層で、八戸火山灰層のIV層にあたる。長径2cmほどの軽石が密集し、長径1mm程度の黒色岩片を含んでいる。

XII層は灰白色粘土質火山灰層で、八戸火山灰層のIII層にあたる。粘土質層の上位に数本の赤褐色のバンドがみられるのは、地下水による鉄分の沈着によるものである。



B1-27村近基本層序

第I層	10R 2/1	黒色土	小礫(φ<5mm)・木根が少量、0-1粒程度。しまり腐、表土。
第II層	10R 2/1	黒色土	To-b程度。黒腐起源の中層層下平を中心に侵入。
第III層	10R 2/2	黒褐色砂質土	中層母材層。南部浮石起源と考えられる浮石層(φ<20mm)少量。
第IV層	10R 2/2	黒褐色土	中層母材層。III層に比し粘性に富むもののはほぼ同質。南部浮石起源と考えられる浮石少量。
第IVa層	10R 2/3	黒褐色土	南部浮石少量。上半は一部中層も侵入する。黄褐色0-1粒(φ<2mm)程度。
第IVb層	10R 2/3	暗褐色土	IVa層と同様に南部浮石少量含む、0-1粒程度。
第V層	10R 3/3	暗褐色土	黄褐色0-1粒(φ<20mm)程度。粘性に富む、森林層。
第VI層	10R 5/6	黄褐色0-1	
第VII層	10R 5/8	黄褐色浮石	
第VIII層	10R 6/4	にぶい黄褐色浮石	
第IX層	2.03 5/4	黄褐色0-1	
第X層	2.03 6/3	にぶい黄色0-1	
第XI層	2.03 6/4	にぶい黄色浮石	
第XII層	2.03 8/1	灰白色0-1	

CP-33村近基本層序

第IX層	2.03 6/3	にぶい黄褐色0-1	灰白色浮石(φ<5mm)少量。しまり腐。
第X層	2.03 8/4	浅黄色0-1	黄褐色土の0-1(φ20~100mm)少量。粘性有。
第XI層	2.03 7/3	浅黄色浮石	黄褐色浮石(φ<2mm)少量。小礫侵入。
第XII層	2.03 6/3	にぶい黄色0-1	黄褐色0-1粒(φ<2mm)少量。粘性有。
第XIII層	2.03 8/2	灰白色浮石	明黄褐色浮石(φ<1mm)少量。極小礫侵入。
第XIV層	2.03 8/4	浅黄色0-1	灰白色浮石(φ<5mm)少量。粘性あり。
第XV層	2.03 7/3	浅黄色浮石	淡黄色土との混合層。小礫侵入。
第XVI層	2.03 7/3	浅黄色0-1	灰白色浮石(φ<2~10mm)。粘性あり。しまり腐。明黄褐色浮石(φ<2mm)が少量層の下部に侵入する。
第XVII層	10R 1.7/1	黒色土と10Y 4/1	1層灰褐色0-1の混合層。粘性有。
第XVIII層	10R 4/6	褐色0-1	にぶい黄褐色浮石(φ<3mm)少量。粘性有。

図6 基本層序

第3章 縄文時代の検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

今回の調査で検出された竪穴住居跡は6軒である。いずれも調査区西側、標高53～60mの斜面部に位置している。平面形は長軸3m前後の円形もしくは楕円形を呈する。炉は土器埋設炉、地床炉であるが、炉が検出されなかったものもある。これらの年代は、出土遺物から縄文時代後期を中心とする時期のものと考えられる。以下、遺構ごとに述べる。

第6号竪穴住居跡(図7)

〔位置・確認〕調査区南西側BL-19グリッドを中心に位置する。第Ⅲ層掘り下げ時に黒褐色土の円形の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕長軸282cm、短軸279cmである。平面形は円形を呈する。床面積は4.5㎡である。

〔堆積土〕13層に分層した。中振浮石、黄褐色ロームを微量に含む黒褐色土を主体とする。炭化物・焼土粒が含まれ、12層内には焼土・炭化物が塊状に混入している。遺物の出土状況からみても堆積土は人為的にまとまって廃棄されたのであろう。

〔壁・床面〕壁面は緩やかに丸味を帯びて立ち上がる。壁高は83cmである。床は第Ⅳ層を床面としており、中央付近がやや窪んでいる。

〔柱穴・炉〕柱穴・炉ともに検出されなかった。遺構内中央の床面直上からは炭化物・焼土塊がまとまって検出されたが、検出状況から、廃棄による二次堆積と考えられる。

〔その他の施設〕床面調査時に南側から土坑が1基検出された。平面形は不整形を呈し、規模は長軸156cm、短軸131cm、深さ23cmである。遺物は出土しておらず、住居跡との重複関係から本土坑の方が古い。用途については不明だが、住居跡の廃絶時にはすでに埋まっていたものと考えられる。

〔出土遺物〕縄文時代の土器が3681.4g出土した。1は口縁部～胴部上半を欠くほぼ完形の深鉢である。住居内北東側の3層から一括して出土した。底部から丸味を帯びて立ち上がり、口縁部で内湾する。地文は、単節LRの横回転によって斜走縄文となる。口縁部には、破損部に対になる様に2個の補修孔が穿孔されている。時期は縄文時代後期後葉～晩期のものと考えられる。2は深鉢の口縁部破片である。複節LRの横回転によって斜走縄文となる。時期は縄文時代後期のものと考えられる。

〔小結〕本遺構は柱穴や炉跡が検出されず、土坑の可能性も考えられるが、平面形や壁面の立ち上がりなどから住居跡として扱った。出土遺物から縄文時代後期後葉～晩期のものと考えられる。

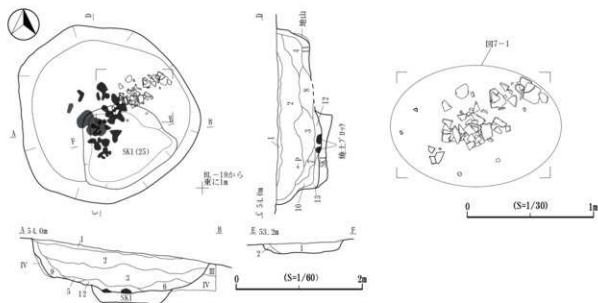
(澤田)

第7号竪穴住居跡(図8)

〔位置・確認〕BL・M-34に位置する。現代の盛土を除去後に、第Ⅳ層で黒色土の楕円形の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕平面形は、長軸300cm、短軸216cmの楕円形を呈する。床面積は4.5㎡である。

〔堆積土〕11層に分層した。1～4層までの上層は黒色土を主体とし、5～11層までの下層は黒色土、黒褐色土及び黄褐色土との混合土を主体とする。上層は自然堆積、下層は人為堆積の可能性が高い。



第6号竪穴住居跡

- 第1層 10YR3/2 暗褐色土 白色浮石(φ~1mm)、黄色浮石(φ2~5mm)散量。
 第2層 10YR2/2 黒褐色土 白色浮石(φ~1mm)少量、黄色浮石(φ2~5mm)散量。しまりあり。
 第3層 10YR3/3 暗褐色土 白色浮石(φ~1mm)、黄色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ1~2mm)散量。黄色浮石は2層よりも粒が大きい。しまり、粘性中々あり。
 第4層 10YR3/2 黒褐色土 黄色浮石(φ2~5mm)、白色浮石(φ~1mm)散量。しまりややあり。
 第5層 10YR1.7/1 黒色土 粘性中々あり。
 第6層 10YR2/1 黒色土 黒褐色土多量。上面に黄色浮石(φ2~5mm)散量。粘性ややあり。
 第7層 10YR1.7/1 黒色土 黒色土多量。黄色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ1~2mm)散量。しまり、粘性あり。
 第8層 10YR2/2 黒褐色土 黒色土多量。黄色浮石(φ2~5mm)、炭化物散量。しまり粘性中々あり。

- 第9層 10YR3/2 黒褐色土 白色浮石(φ~1mm)、黄色浮石(φ2~5mm)散量。
 第10層 10YR2/2 黒褐色土 白色浮石(φ~1mm)、黄色浮石(φ2~5mm)散量。
 第11層 10YR2/2 黒褐色土 白色浮石(φ~1mm)、黄色浮石(φ1~2mm)散量。粘性あり。
 第12層 10YR2/1 黒色土 炭化物(φ1~2mm)散量。粘土と考えられる明褐色土が7~9枚に窺われる。しまり・粘性ややあり。
 第13層 10YR3/2 黒褐色土 黄色浮石(φ2~5mm)散量。

第6号竪穴住居跡 SK1

- 第1層 10YR3/2 黒褐色土と炭化物・粘土粒少量。黄色色(φ1~3mm)、10YR4/1 に近い黄褐色浮石(φ~1mm)散量。
 第2層 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色ローム粒(φ1~5mm)、にぶい黄褐色浮石(φ~1mm)、炭化物・粘土粒散量。



図7 第6号竪穴住居跡

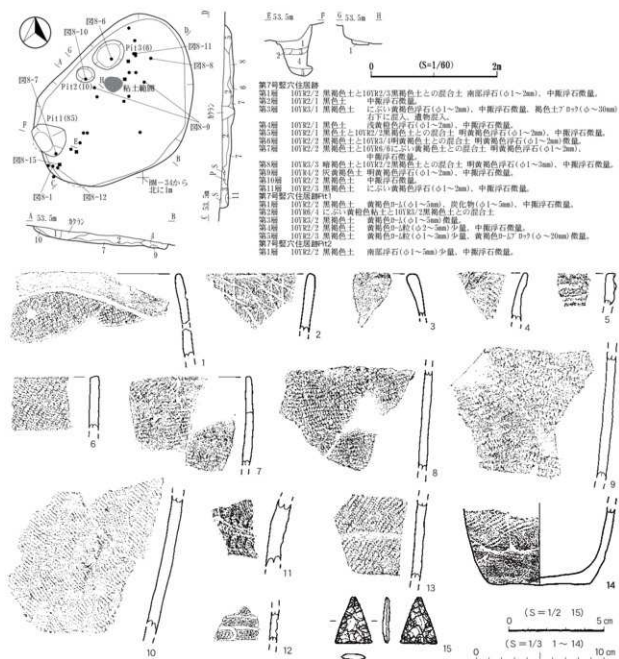


図8 第7号竪穴住居跡

〔壁・床面〕 壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は40cmで床面はほぼ平坦であるが、南東側に若干傾斜している。また、床面北東側からは28×24cmの粘土範囲が検出された。

〔柱穴〕 3基検出された。ピット1は長軸58cm、短軸47cm、深さ85cm、ピット2は長軸29cm、短軸25cm、深さ10cm、ピット3は長軸52cm、短軸40cm、深さ6cmである。ピット1は主柱穴の可能性があるが、これ以外に同様の規模の柱穴は検出されなかった。ピット2・3は掘り込みが浅く、柱穴ではない可能性も考えられる。

〔炉〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 堆積土及び床面から縄文時代の土器が1407.2g出土した。この他に無茎平基の石鏃が1点出土した(15)。1~7は深鉢及び鉢の口縁部破片である。1は磨消縄文が、2は単軸絡条体第

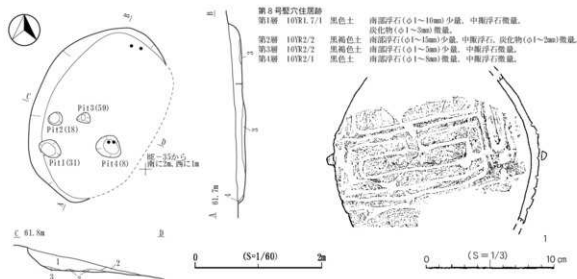


図9 第8号竪穴住居跡

5類がそれぞれ施される。5は口唇部が面取りされている。8～13は胴部破片、14は単節LRが施される底部破片である。

〔小結〕 炉が検出されず柱穴配置も不明であるが、平面形、規模から竪穴住居跡とした。また、出土遺物から縄文時代後期のものと考えられる。

第8号竪穴住居跡 (図9)

〔位置・確認〕 調査区北西のBD-34グリッドに位置する。現代の盛土除去後に第IV層で黒色土の楕円形の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕 本遺構は斜面上に構築されており南東側が失われている。残存規模は長軸283cm、短軸198cmであり、楕円形を呈すると思われる。残存する床面積は3.8㎡である。

〔堆積土〕 4層に分層した。いずれも黒色土及び黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。

〔壁・床面〕 残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は52cmで床面はほぼ平坦である。

〔柱穴〕 4基検出された。いずれも床面南側から検出されているが、柱穴配置など詳細は不明である。

〔炉〕 検出されなかった。

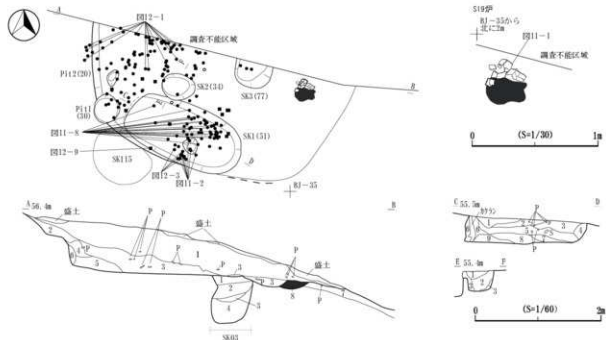
〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器が80.3g出土した。1は沈線文が施される壺の胴部破片であり、胴部には穿孔が施される。

〔小結〕 炉が検出されず柱穴配置も不明であるが、平面形、規模及び周囲の遺構との関係から竪穴住居跡とした。また、出土遺物から縄文時代後期初頭のものと考えられる。

第9号竪穴住居跡 (図10～12)

〔位置・確認〕 BI・J-35グリッドに位置する。現代の盛土除去後に、第III層で黒色土の半円形の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕 本遺構は斜面上に構築されている。北側は調査不能区域であり、東側も失われているため平面形は不明である。残存規模は長軸329cm、短軸177cmである。床面積は6.4㎡である。



第9号竪穴住居跡

第1層	101K1/1 黒色土	黄褐色砂-土粒(φ1~3mm)、中層浮石、T=6(φ1~2mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)少量。遺物混入、II層類似。
第2層	101K2/1 栗褐色土	と101K1/1(栗褐色土)の混存。黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)、T=6(φ1~2mm)少量。
第3層	101K2/2 栗褐色土	黄褐色砂-土粒(φ1~5mm)少量。中層浮石少量。炭化物混入。遺物混入。
第4層	101K2/3 栗褐色土	黄褐色砂-土粒(φ1~5mm)、中層浮石少量。
第5層	101K2/4 黒色土	黄褐色砂-土粒(φ1~5mm)、中層浮石少量。炭化物混入。
第6層	101K2/5 暗褐色土	明黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)少量。中層浮石少量。磨石上。
第7層	101K2/6 栗褐色土	灰色土層。明黄褐色砂-土粒(φ1~2mm)、中層浮石少量。炭化物混入。遺物混入。
第8層	101K2/7 明赤褐色土	粘土層。褐色土と砂-土粒。明黄褐色砂-土粒(φ2~10mm)、中層浮石少量。
第9層	101K2/8 栗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。白色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ~10mm)少量。
第10層	101K2/9 暗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。白色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ~2mm)少量。遺物混入。
第11層	101K2/10 暗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~5mm)少量。白色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ~10mm)少量。遺物混入。
第12層	101K2/11 暗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~5mm)少量。白色浮石(φ2~5mm)少量。炭化物(φ~2~5mm)少量。
第13層	101K2/12 栗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。白色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ3~20mm)少量。遺物混入。
第14層	101K2/13 栗褐色土	中層浮石、明黄褐色浮石(φ2~5mm)、白色浮石(φ~2mm)、黄褐色砂-土粒(φ~30mm)少量。
第15層	101K2/14 栗褐色土	明黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。中層浮石少量。
第16層	101K2/15 栗褐色土	に2-3の黄褐色浮石(φ2~10mm)中層。暗褐色土少量。炭化物(φ~10mm)少量。
第17層	101K2/16 暗褐色土	B-土粒(φ~1mm)、炭化物(φ2~3mm)、明黄褐色浮石(φ2~12mm)、に2-3の黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。
第18層	101K2/17 暗褐色土	B-土粒(φ~1mm)、明黄褐色浮石(φ2~10mm)少量。灰黄褐色浮石(φ2~5mm)、炭化物(φ~20mm)少量。
第19層	101K2/18 暗褐色土	黄褐色浮石(φ2~5mm)少量。B-土粒(φ~1mm)少量。
第20層	101K2/19 栗褐色土	明黄褐色浮石(φ1~5mm)少量。黒色土層。
第21層	101K2/20 栗褐色土	灰黄褐色浮石(φ1~5mm)少量。明黄褐色砂-土粒(φ1~10mm)、炭化物(φ~2mm)少量。
第22層	101K2/21 栗褐色土	明黄褐色浮石(φ1~5mm)少量。黄褐色浮石(φ1~3mm)、炭化物(φ~10mm)少量。
第23層	101K2/22 栗褐色土	暗褐色土、黄褐色浮石(φ1~5mm)少量。

図10 第9号竪穴住居跡(1)

〔堆積土〕 8層に分層した。黒色土及び黒褐色土を主体とし、自然堆積と考えられる。8層は粘土層であり、地床炉と考えられる。

〔壁・床面〕 残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は60cmで床面は平坦である。

〔柱穴〕 2基検出された。いずれも南西壁付近からの検出であるが、柱穴配置など詳細は不明である。

〔炉〕 床面東側から地床炉が検出された。火床面の規模は長軸30cm、短軸18cmの不整形を呈するが、北半は調査不能区域にかかっているため全体形は不明である。火床面直上からは深鉢が敷かれたような状態で出土している(図11-1)。土器片敷炉の可能性も考えられるが、土器片直上から焼土は検出されなかった。同様の出土状況は前年度調査で検出された第5号竪穴住居跡でもみられる。

〔その他の施設〕 土坑が3基検出された。いずれも本遺構に伴うものと考えられる。第1号土坑は長軸196cm、短軸98cmの楕円形を呈し、深さは51cmである。第2号土坑は平面形が直径46cmのほぼ円形を呈し、深さは34cmである。ピットの可能性も考えられる。第3号土坑は一部のみの検出であるため平面形は不明であるが、長軸58cm、残存短軸39cm、深さ77cmである。

〔出土遺物〕 堆積土中から縄文土器が7853.7g出土した。図11-2は波状口縁の深鉢である。口縁

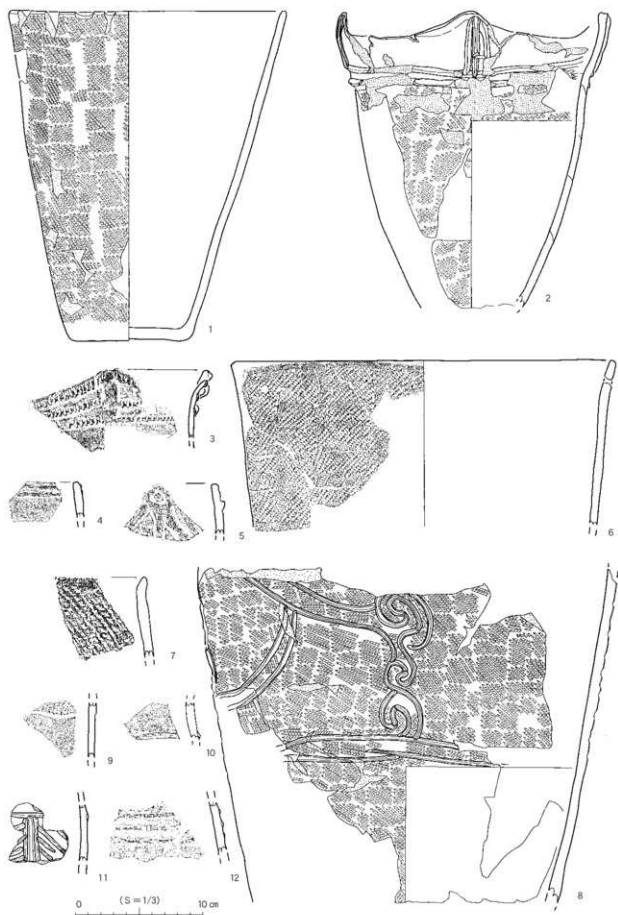


图11 第9号竖穴住居跡(2)

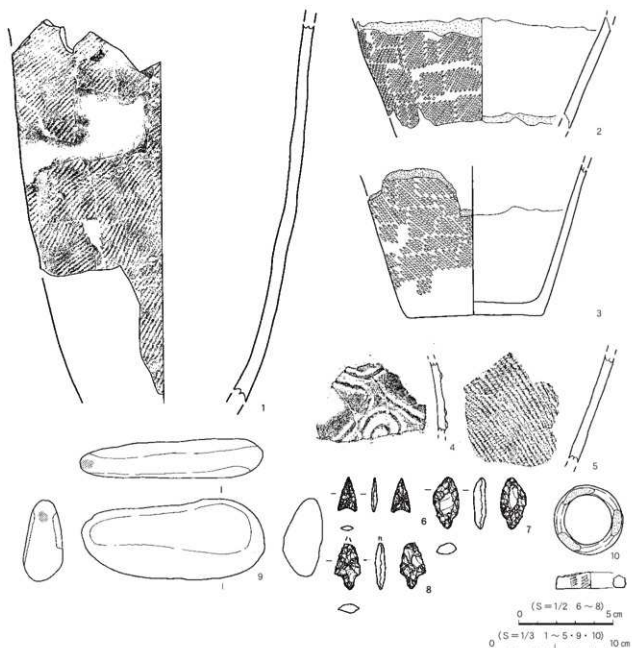


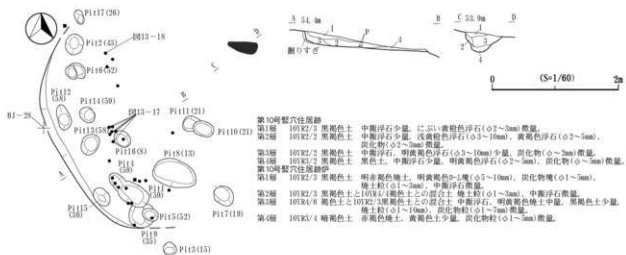
図12 第9号竪穴住居跡(3)

部にはミガキが施され、3条1単位で縦位の隆帯が施される。また口縁部下端には2条の隆帯が横位に施される。8は第1号土坑周辺からまとめて出土しており、胴部には渦巻文が施される。11は縦位及び斜位の隆帯で樹木文様が施される。図12-6~8は石鏃である。基部形態は6が無茎凹基、7・8は有茎凸基である。9は磨石である。先端部に狭小の機能面を持つ。10は土製品としたが、上面には接合痕が3ヶ所確認されることから台付土器の台部の可能性もある。

〔小結〕 床面出土遺物から、縄文時代後期初頭のものと考えられる。

第10号竪穴住居跡(図13)

〔位置と確認〕 調査区西側B J - 27・28グリッドに位置する。第IV層を精査中に黒褐色土の楕円形の落ち込みとして確認した。



- 第10号竖穴住居跡
- 第1層 101K2/3 黒褐色土 中層浮石少量、 SiO_2 黄褐色浮石($\phi 2\sim 3\text{mm}$)微量。
 - 第2層 101K2/2 黒褐色土 中層浮石少量、浅黄褐色浮石($\phi 3\sim 10\text{mm}$)、黄褐色浮石($\phi 2\sim 5\text{mm}$)、炭化物($\phi 2\sim 3\text{mm}$)微量。
 - 第3層 101K2/2 黒褐色土 中層浮石、明黄褐色浮石($\phi 3\sim 10\text{mm}$)少量、炭化物($\phi\sim 2\text{mm}$)微量。
 - 第4層 101K2/2 黒褐色土 黒色土、中層浮石少量、明黄褐色浮石($\phi 2\sim 5\text{mm}$)、炭化物($\phi\sim 5\text{mm}$)微量。
 - 第5層 101K2/3 黒褐色土 明黄褐色粘土、明黄褐色土層($\phi 5\sim 10\text{cm}$)、炭化物塊($\phi 1\sim 5\text{cm}$)、粘土粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)、中層浮石微量。
 - 第6層 101K2/3 黒褐色土と101R4/4褐色土との混合土 粘土粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)、中層浮石微量。
 - 第7層 101R4/6 褐色土と101K2/2黒褐色土との混合土 中層浮石、明黄褐色粘土中量、黒褐色土少量、粘土粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)、炭化物粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)微量。
 - 第8層 101K3/4 暗褐色土 赤褐色粘土、黄褐色土少量、炭化物粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)微量。

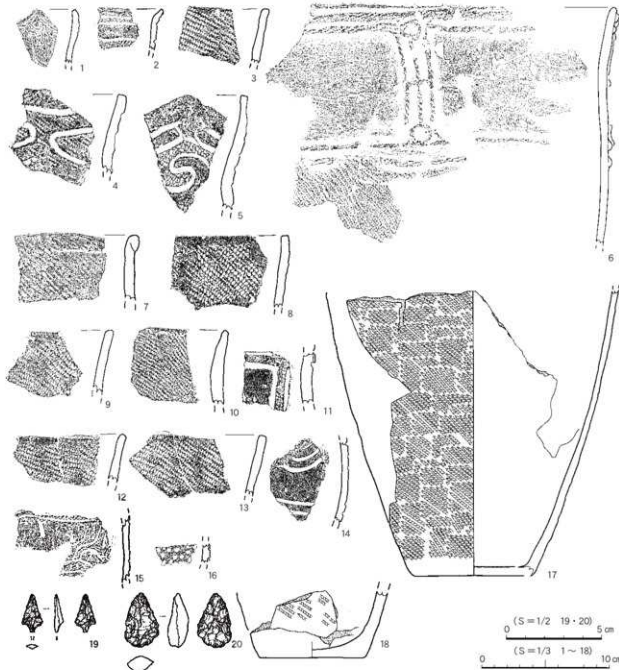


図13 第10号竖穴住居跡

[平面形・規模] 遺構の東側が失われているため平面形は不明である。残存規模は長軸387cm、短軸302cmである。残存する床面積は10.5㎡である。

[堆積土] 4層に分層した。いずれも黒褐色土を主体とする。3・4層中には炭化物が含まれる。

[壁・床面] 残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は29cmで床面はほぼ平坦である。

[柱穴] 17基検出された。西壁に沿うように分布するものが多いが、本遺構の東側からは検出されなかったため柱穴配置など詳細は不明である。

[炉] 床面北東側から焼土範囲が検出された。規模は長軸44cm、短軸18cmの不整形を呈する。焼土範囲の下部からは深さ38cmの掘り込みが検出された。この焼土範囲は本遺構の地床炉と考えられるが、検出面の標高が床面よりも低いため、本遺構に伴わない可能性もある。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が2725.5g出土した。1～10・12・13は深鉢の口縁部である。1は波状口縁で渦巻文が施されるが、ミニチュア土器の可能性もある。4・5はともに沈線文が施される。6は口縁部文様帯を隆帯で区画する。また、縦位の隆帯とともにボタン状の貼付も施される。14は沈線文が施される胴部破片である。外面には赤色顔料が塗布される。19・20は石鏃である。19は有茎鏃で基部が欠損している。20は円基鏃である。

[小結] 出土遺物から縄文時代後期初頭のものと考えられる。

第11号竪穴住居跡 (図14)

[位置と確認] BF・G-26グリッドに位置する。第Ⅲ層を精査中に黒褐色土の円形の落ち込みとして確認した。

[平面形・規模] 北東側が失われているものの、長軸283cm、短軸256cmの楕円形を呈すると考えられる。床面積は5.2㎡である。

[堆積土] 4層に分層した。黒褐色土及び黒色土を主体とする。3層からは炭化物及び焼土がまぎって出土している。

[壁・床面] 北東側が失われているが、残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は49cmである。床面はほぼ平坦であるが、斜面下方に当たる東側がやや傾斜している。

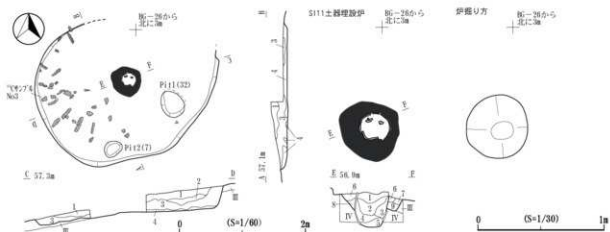
[柱穴] 2基検出された。ピット1は長軸42cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さは32cmである。ピット2は長軸28cm、短軸24cmの楕円形を呈し、深さは7cmである。ピット1が支柱穴の可能性も考えられるが、詳細は不明である。

[炉] 床面中央から土器埋設炉が検出された。炉体土器は胴部に単節LRが施された粗製の深鉢であるが、底部を欠いた状態で埋設されている。堆積土は掘り方も含め9層に分層した。2層が火床面と考えられる。また、炉の周囲にも約48cm四方の範囲に焼土が分布する。

[出土遺物] 堆積土中から縄文土器が1656.5g出土した。1は炉体土器である。胴部に最大径を持ち、口縁部にかけて緩やかに内湾しながら立ち上がる。全面に単節LRが、口縁部にはB突起がそれぞれ施される。3は先端を欠く磨製石斧である。

[小結] 炉体土器から縄文時代後～晩期の焼失住居と考えられる。なお、出土炭化物を用いた放射性炭素年代測定では2810±30yr BPとの結果が得られている。詳細は第8章第1節を参照されたい。

(葛城)



第11号竪穴住居跡

- 第1層 101K2/2 黒褐色土 黒色土少量、焼土粒(φ1~10mm)、黄褐色浮石粒(φ1~10mm)、炭化物塊(φ5~20mm)、中層浮石
T₀-H1~3mm散量。
第2層 101K3/3 暗褐色土 黒褐色土少量、黄褐色浮石粒(φ1~10mm)散量。
第3層 101K2/1 黒色土之101K2/2黒褐色土之層合土、黄褐色浮石粒(φ1~10mm)、炭化物塊(φ5~20mm)、焼土塊(φ10~30mm)、中層浮石散量。
第4層 101K3/3 暗褐色土 黄褐色浮石粒(φ1~5mm)、中層浮石散量。

第11号竪穴住居跡土器埋設部

- 第1層 101K2/2 黒褐色土 黄褐色D-土粒、中層浮石、炭化物(φ1~2mm)散量。
第2層 101K3/4 暗褐色土 黄褐色粘土多量、黄褐色D-土粒(φ1~2mm)散量。
第3層 101K2/2 黒褐色土 黄褐色D-土粒(φ~1mm)散量。
第4層 101K2/2 黒褐色土 暗褐色土少量、黄褐色D-土粒(φ1~2mm)散量、炭化物(φ~20mm)層入。
第5層 101K3/4 暗褐色土 炭化物(φ1~2mm)、黄褐色D-土粒(φ1~2mm)散量。
第6層 101K2/2 黒褐色土、炭化物、明褐色焼土中層、黄褐色D-土粒(φ1~2mm)散量。
第7層 101K3/3 暗褐色土 黒褐色土少量、黄褐色D-土粒(φ~1mm)散量。
第8層 31E/3 明赤褐色土 炭化物(φ1~2mm)、明黄褐色D-土粒(φ~1mm)散量。
第9層 101K2/1 黒色土 黄褐色D-土粒(φ1~2mm)散量。

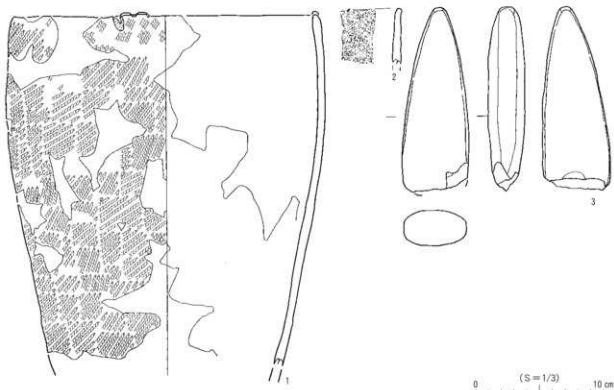


图14 第11号竪穴住居跡

第2節 土坑

今回の調査で検出された縄文時代の土坑は25基である。個別の記載は行わず概要のみを述べる。個々の計測値などについては遺構一覧表を参照されたい。

縄文時代の土坑はBUIラインから西側、標高50～59mの傾斜面に分布している。検出された25基の約半数にあたる12基がBP-15グリッド付近にまとまって分布している。これらは第Ⅲ～V層で検出された。

平面形は円形を基調とするもの21基、方形を基調とするもの2基、不整形のもの2基に分類した。円形基調のもの内、長軸を短軸で割った値が1.2未満を円形、1.2以上を楕円形とした場合、円形は16基(第28・55・59・60・63・64・69・72・81・84・96・111・113・114・131・133号土坑)、楕円形は5基(第53・54・68・132・165号土坑)である。方形基調のものは方形(第91号土坑)と長方形(第112号土坑)のものがある。この他に不整形のもの(第103・116号土坑)がある。

規模は、長軸が50～161cmで平均は106cmである。短軸が48～158cmで平均は98cmである。深さが11～122cmで平均は48cmである。

断面形は底面から開口部に向かって緩やかに外傾しながら立ち上がるもの(第53・54・64・91・96・103・111・112・114・116・132号土坑)、底面から外傾しながら立ち上がり、途中で屈曲し大きく外反するもの(第81・113・133号土坑)、フラスコ状を呈するもの(第28・55・59・60・63・68・69・72・84・131号土坑)、立ち上がりが一様でないもの(第165号土坑)がある。

底面はほぼ平坦であるが、底面に小ピットを持つもの(第81・113・114・133号土坑)がある。小ピットは底面ほぼ中央から1～5基検出された。小ピットの規模は、第81号土坑が1基で直径19cm、深さ22cm、第113号土坑が5基で直径7～11cm、深さ19～29cm、第114号土坑が4基で直径8～15cm、深さ6～15cm、第133号土坑が5基で直径7～10cm、深さ14～27cmである。

堆積土は黒色土及び黒褐色土を主体とする。堆積土中には第Ⅲ・Ⅳ層起源と考えられる中振浮石及び南部浮石が含まれ、総じて自然堆積の可能性が高い。また、第55号土坑は地滑りの影響を受けており、断面にずれが生じている。

出土遺物は、主に縄文時代中～後期にかけての土器、石器が出土した。大半が、土器の小破片や石鏃及び磨製石斧がわずかに出土するもの(第28・60・91・96・116号土坑)であるが、第131号土坑からはまとまって出土している。12は鉢の胴部破片である。沈線文が施され、外面には赤色顔料が付着している。9・14・15は深鉢である。いずれも頸部にくびれをもち、口縁部にかけて外反する。9は底面直上から出土した。地文に単節RLが、口縁部～胴部にはS字状文がそれぞれ施される。

年代については、出土遺物から縄文時代中期後葉から後期初頭のものと考えられる。遺物が出土しなかったものについても、堆積土及び断面形状などからおおむね縄文時代のものと考えられるが、他の年代に帰属するものが含まれている可能性も否定できない。また、前述のように本遺構群の分布については調査区西側にまとまりが見られ、後世に削平が行われたと考えられる調査区東側からは検出されなかった。しかし、沢1の底面からは縄文土器及び第3号木組遺構が検出されていることから、当該期の遺構、遺物がほとんど検出されなかった沢1の周辺を含む調査区東側についても、何らかの人間活動が行われていた可能性が考えられる。

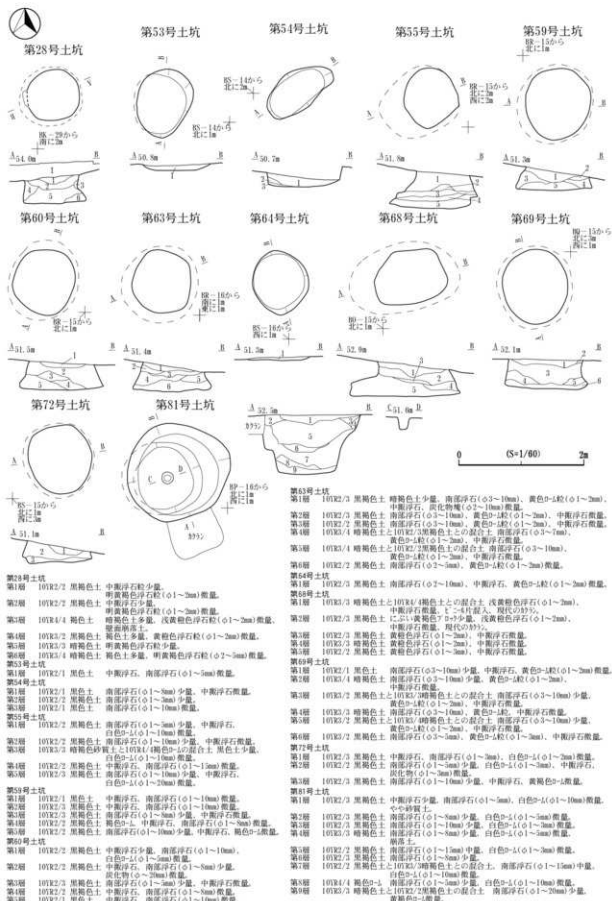
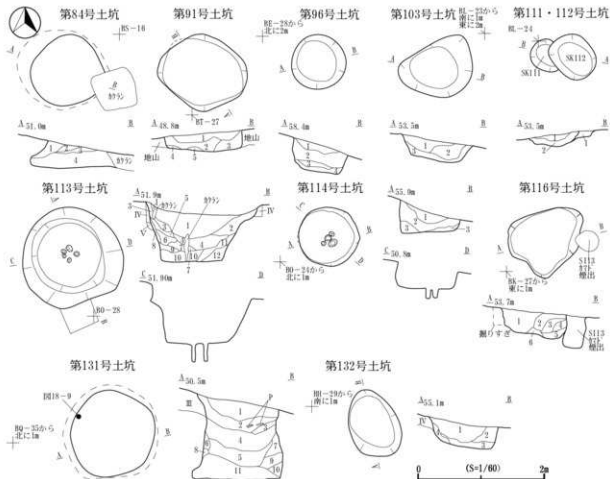


図15 縄文時代の土坑(1)



- 第84号土坑**
 第1層 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石(φ1~5mm)、黄褐色土少量、中腹浮石微量。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 南部浮石(φ1~2mm)、中腹浮石微量。
 第3層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土少量、南部浮石(φ1~2mm)、中腹浮石微量。
 第4層 10YR2/2 暗褐色土 南部浮石(φ1~5mm)少量、中腹浮石微量。
- 第91号土坑**
 第1層 10YR2/3 暗褐色砂質土 明黄褐色土(φ1~4mm)、中腹浮石、灰白色浮石(φ1~2mm)微量。
 第2層 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~3mm)、中腹浮石、焦土粒(φ~1mm)微量、1層に比、やや中粒に富む。
 第3層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~2mm)少量、酸化物(φ1~1mm)、灰白色浮石(φ1~2mm)、中腹浮石微量。
 第4層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~2mm)、中腹浮石微量。
 第5層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~2mm)少量。
- 第96号土坑**
 第1層 10YR1/7/1 黒色土 中腹浮石、南部浮石(φ1~5mm)、白色土(φ1~2mm)微量。
 第2層 10YR2/1 黒色土 南部浮石(φ1~15mm)少量、中腹浮石、白色土(φ1~2mm)微量。
 第3層 10YR2/2 暗褐色土 南部浮石(φ1~5mm)、白(φ1~2mm)微量。
 第4層 10YR2/3 暗褐色土 10YR2/1黒色土の混合土、南部浮石(φ1~6mm)少量、白色土(φ1~2mm)微量。
- 第103号土坑**
 第1層 10YR1/7/1 黒色土 黄色浮石(φ2~5mm)、黄色土(φ1~3mm)微量。
 第2層 10YR2/2 暗褐色土 白色土(φ1~2mm)微量、黄色土(φ1~2mm)少量。
 第3層 10YR2/2 暗褐色土 黄色土(φ1~2mm)少量。
- 第111号土坑**
 第1層 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土(φ1~10mm)、中腹浮石微量。
- 第112号土坑**
 第1層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~10mm)、中腹浮石微量。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~5mm)、黄色土(φ1~2mm)少量、黄色土(φ1~2mm)少量。
- 第113号土坑**
 第1層 10YR2/2 暗褐色土 白(黄褐色土)土、黄褐色土(φ2~10mm)、黄褐色土(φ1~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 白(黄褐色土)土、黄褐色土(φ2~10mm)、黄褐色土(φ1~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第3層 10YR2/3 暗褐色土 白(黄褐色土)土、黄褐色土(φ2~10mm)、黄褐色土(φ1~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第4層 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第5層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第6層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第7層 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第8層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
 第9層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量。
- 第114号土坑**
 第1層 10YR2/1 黒色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量。
 第3層 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量。
- 第116号土坑**
 第1層 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土(φ2~30mm)少量、酸化物(φ1~2mm)、灰白色土(φ1~1mm)微量。
 第2層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量、灰白色土(φ1~1mm)微量。
 第3層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量、灰白色土(φ1~1mm)微量。
 第4層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ2~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)少量、灰白色土(φ1~1mm)微量。
- 第131号土坑**
 第1層 10YR2/2 暗褐色砂質土 白(黄褐色土)土(φ1~10mm)、酸化物(φ1~2mm)、中腹浮石微量。
 第2層 10YR2/2 暗褐色砂質土 明黄褐色土(φ1~10mm)少量、酸化物(φ1~2mm)、中腹浮石微量、遺物あり。
 第3層 10YR4/6 暗褐色土 黄褐色土(φ1~2mm)、酸化物(φ1~2mm)微量。
 第4層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~15mm)少量、中腹浮石微量。
 第5層 10YR2/3 暗褐色土 白(黄褐色土)土(φ1~2mm)、酸化物(φ1~2mm)微量、粘りあり、燻土層あり。
 第6層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~2mm)、灰黄褐色土(φ1~2mm)微量、粘りあり、燻土層あり。
 第7層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~2mm)、灰黄褐色土(φ1~2mm)微量、粘りあり、燻土層あり。
 第8層 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土(φ1~2mm)少量、酸化物(φ1~2mm)微量、燻面脱落土。
 第9層 10YR2/3 暗褐色土 粘りあり、燻土層あり。
 第10層 10YR2/3 暗褐色土と10YR4/6暗褐色土との混合土、灰白色土(φ1~2mm)微量、灰白色土(φ1~2mm)微量。
- 第132号土坑**
 第1層 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~15mm)中腹、中腹浮石少量。
 第2層 10YR2/2 暗褐色土 黄褐色土(φ1~5mm)少量、中腹浮石少量。
 第3層 10YR2/2 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~5mm)少量、中腹浮石少量。
 第4層 10YR2/3 暗褐色土 明黄褐色土(φ1~5mm)少量、中腹浮石微量。

図16 縄文時代の土坑(2)



図17 縄文時代の土坑(3)・溝状土坑

第3節 溝状土坑

今回の調査で検出された溝状土坑は1基である。溝状土坑は過去2度の調査も含めて、はじめての検出である。ただし、前節で述べた床面に小ビットをもつ土坑は落し穴と考えられることから、本遺跡は縄文時代を通して断続的に狩猟場として利用されたと考えられる。以下、第1号溝状土坑について述べる。

第1号溝状土坑(図17)

〔位置と確認〕 調査区北西端BE-35・36グリッドに位置する。標高59mの斜面から、等高線にほぼ平行する様に検出された。第IV層を精査中に黒色土の溝状の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 第5号溝跡と重複し本遺構が古い。

〔平面形・規模〕 規模は長軸300cm、短軸23cm、深さ60cmである。

〔堆積土〕 堆積土は3層に分層した。黒色土を主体とし、層中には中振浮石を含む。

〔出土遺物〕 堆積土中から口縁部に沈線文の施された土器破片が1点出土した。19は深鉢の胴部破片である。胴部には単節RLが施され、胎土には海綿骨針が含まれる。

〔小結〕 出土遺物から縄文時代後期以降のものと考えられる。

(葛城)

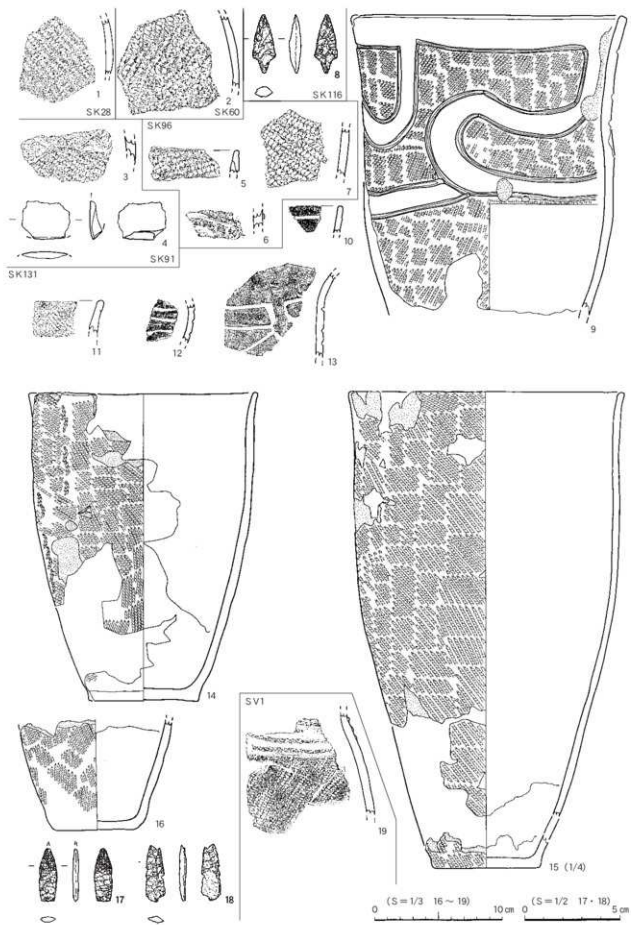


図18 縄文時代の土坑・溝状土坑出土遺物

第4節 木組遺構

今回の調査で検出された木組遺構は3基である。この内、縄文時代に帰属すると考えられるものは第3号木組遺構1基である。本遺構は検出状況から沢1に伴う遺構であるが、縄文時代に帰属する遺構であるため本節で記述する。

第3号木組遺構（図19～22）

〔位置・確認〕CF・G-29グリッドに位置する。沢1底面の纒層除去後に本遺構の一部を検出した。

〔平面形・規模〕平面形は長軸237cm、短軸133cmの長方形を呈する。また、沢1の底面を掘り込んで構築されており、その深さは26cmである。

〔構造〕構造については便宜上、杭、木枠、掘り込み、流路に分類して述べる。

杭（図19・22-1～5）

4本検出された。樹種は全てクリである。杭1(2)は長さ50.6cm、幅9.7cm、厚さ7.1cm、杭2(3・5)は長さ43.3cm、幅9cm、厚さ7cm(3)、長さ21.8cm、幅6.8cm、厚さ5.4cm(5)、杭3(1)は長さ35cm、幅6.9cm、厚さ5.9cm、杭4(4)は長さ21.6cm、幅6.8cm、厚さ3cmである。杭1・2は東側に傾いている。これらは遺構底面に打ち込まれており、その深さは杭1～3が約20cm、杭4が約10cmである。いずれも掘り方が確認されなかったため、直接打ち込まれたものと考えられる。これらは台形状に配置され、杭同士の間隔は、杭1-2が49cm、杭2-3が159cm、杭3-4が97cm、杭4-1が202cmである。

木枠（図19・22-6・7）

北辺と西辺を確認した。いずれもクリの丸木材を使用している。W-11(7)は北辺に設置されており、長さ220cm、幅13.8cm、厚さ13.8cmである。面取りされており、断面形は多角形状を呈する。この外側には、長さ156cm、幅26cmの丸木材(W-15～17)が設置されている。W-9(6)は西辺に設置されており、長さ73.9cm、幅18.7cm、厚さ8.4cmである。丸木材を半割し、切断面を上に向けて設置されている。この外側にも長さ62cm、幅11cmの丸木材(W-10)が設置されている。これらの下部には黒褐色土が堆積している。堆積土との区別はできなかったが、木枠を固定するためのものである可能性も考えられる。また、木枠は南辺及び東辺からは検出されなかった。しかし杭は4本検出されていることから、本来は木枠が長方形に設置されていた可能性が高い。

また、木枠との関連が考えられる木材も出土した。W-11の北側から出土したW-8は長さ約32cmの棒状を呈する。W-6・7はW-9の北側から出土した。W-7は半割材であるが、切断面を下に向けている。W-1～3・13は南東側からまとまって出土しているが、遺存状態が悪く本遺構に伴うかは不明である。W-1・2の樹種はクリである。

掘り込み

木枠内は掘り込まれている。掘り込みの深さは最大26cmで、底面はほぼ平坦である。また、底面に敷物、敷板及び礫の集積などの施設は確認できなかった。

流路

本遺構が検出された場所における沢1の底面幅は約56cmである。沢1の底面が極端に狭くなるのは本遺構周辺のみであることから、意図的に本区域に構築している可能性も考えられる。

〔堆積土〕2層に分層した。黒褐色土を主体とする。2層からはクルミ、トチの果皮が出土した。総じて自

然堆積と考えられる。

[出土遺物] 底面から木製容器が2点出土した。詳細については後述する。また直径4～37cmの自然礫が、W-9・10の西側から4点まとまって出土した。用途は不明であるが、本遺構に伴う可能性が考えられる。礫の下部には74×64cmの不整形の掘り込みが検出された。なお、本遺構に伴う土器は出土しなかった。

[小結] 本遺構の用途は、堅果類の果皮が堆積土中から出土したこと、木製容器の未製品が底面から出土したことから、水さらし場及び貯蔵場と考えられる。本遺構の年代は、図22-3の杭2及び図21-1の木製容器を用いた放射性炭素年代測定結果から、縄文時代中期後葉のものと考えられる。詳細は第8章第1節を参照されたい。(葛城)

木製容器 (図20-1・図21-1)

容器の大まかな形を作り出した段階の容器の未製品が2点出土した。いずれも、樹種はクリで、横木取りの半割材を素材としている。

鉢形 (図20-1)

把手と脚部のある浅鉢の未製品である。容器全体の大まかな形を作り、内部を削り抜き始めた段階のものである。年輪の形状から、脚部近くに樹芯部があったことが伺える。素材の広い割れ面側を底部とした横木取りである。素材は芯持ちの半割材もしくは板目材と思われる。年輪数は60～70本前後を数える。全長72.6cm、最大幅31.0cm、高さ19.0cmである。

表面はおおむね平滑で、外縁から中央に向けて緩やかに窪む。側面は図のむかって左側中央部を除いて、概ね平らに面取りされている。側面と底面との境は明瞭である。底面と脚部は起伏があり加工も粗く、表と側面に比べ成形は進んでいない。

脚部は2つあり、幅4～6cm高さ1～2cmの長方形に削り出されているが、この段階では平らな面が少なく高さも揃いで、設置した際は不安定である。

把手は、容器上面と同じ高さで長軸方向に作り出されている。容器本体と把手の境は、側面を一段深く挟られている。一方の把手裏面では挟りが溝状をなし、他方の把手は中央にも挟りがある。また、この幅の狭い把手の片側は、本体との境に挟りが無く本体から直線状に伸びていることや、把手付近の本体側面に若干の起伏がありざらつくことから、成形途中で割れた可能性が考えられる。

表面には削り抜き始めの痕跡が2カ所明瞭に残る。縁から2～4cm内側を削り抜き、深さは1～2cmと浅い。側縁中央から把手側へは、幅1～2cmの連続した細かい加工あり、加工が階段状をなす部分もみられる。面取りされた側面は材の繊維がケバ立ち全体にざらつく。

想定される容器の完成品は、器の厚さを約2cmの均一とした場合、容器内部は長軸長40～45cm短軸長20～25cmの楕円形で、深さ15cm未満と推測される。

皿形 (図21-1)

平面形は、長軸方向の一方が直線状に、一部欠損している他方は丸味を帯びる長方形となる。長さ73cm幅42cm高さ20.5cmである。端部が全面成形されているため、木取りの方向は不明瞭であるが、素材は芯無しの半割材と考えられる。

内部はほぼ完全に削り抜かれている。内部底は起伏があるが、平滑に整形されている部分もある。口縁からの深さは5～10cmである。側面の厚さがほぼ一定であることや口縁形状も比較的整っている点から、

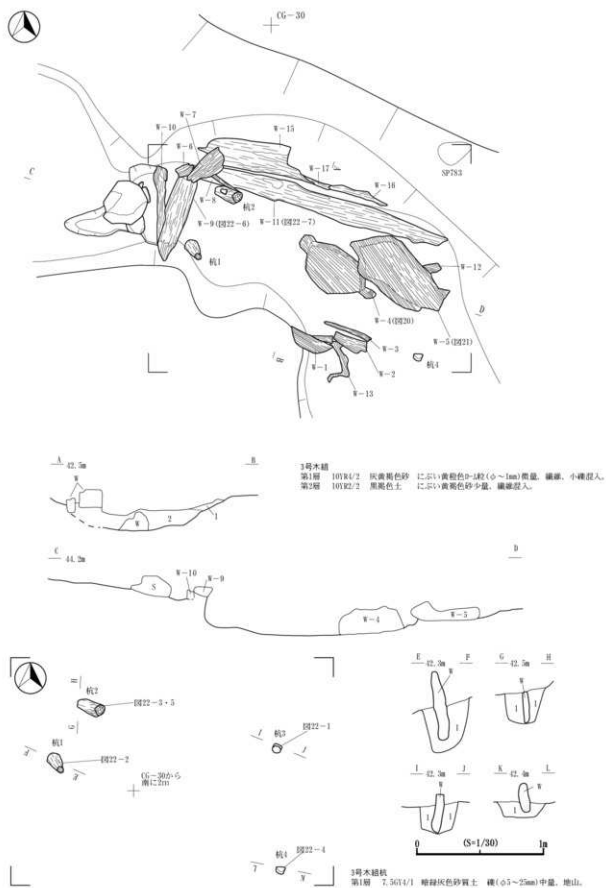


図19 第3号木組遺構(1)

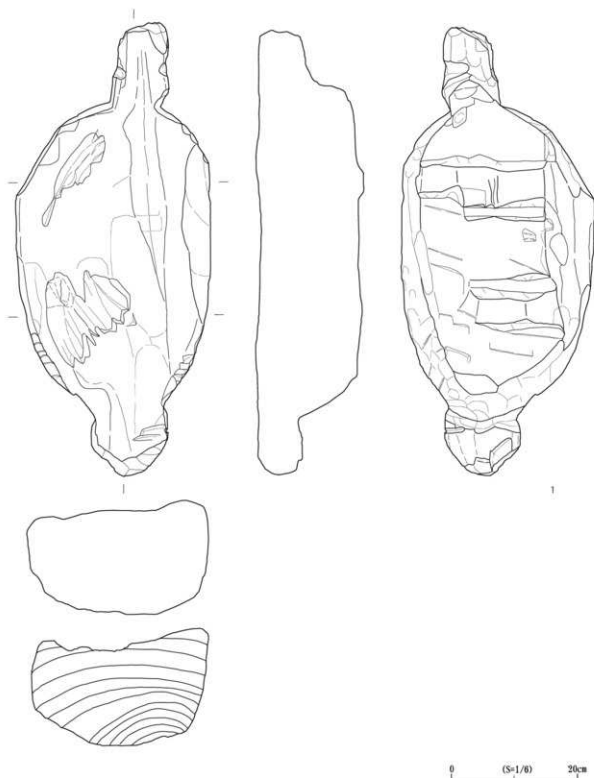


図20 第3号木組遺構(2)

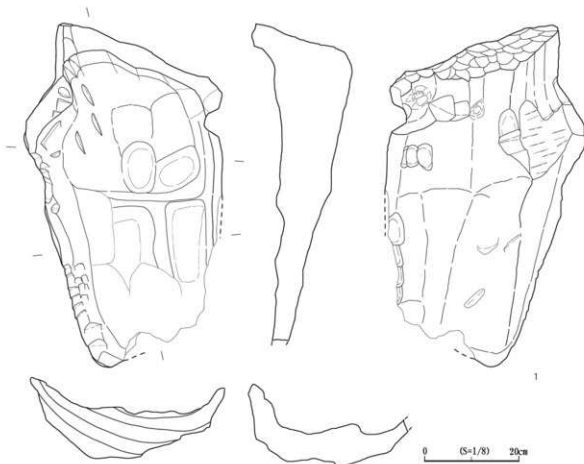


図21 第3号木組遺構(3)

表面の大半は完成形に近い形状で削られている。欠損している下端部は残存状況から、内部底からごく緩やかに立ち上がり、わずかな高みのある縁であったことが推測される。断面形は幅広のU字状を呈する。

裏面は成形された箇所が少なく、枝節部が残り樹皮を剥いだ素材採取時のままの部分が多い。表面に比べ、一つ一つの加工の幅が大きく深い。連続して削られた跡が溝状となる部分もある。容器の厚さを均一にするため、裏面の最も高い位置から表面にむかって大きさ3～5cm単位の削りの跡が連続する。工具の刃部痕から、幅5cmと2～3cmの2種類の工具を使用していたことが伺える。

想定される完成品は、器厚を約4cmの均一とした場合、長さ約70cm幅約40cmの長方形で、深さ5cm前後と推測される。

これまでの調査事例から、木製容器の製作工程は「①原木からの木取り→②両端の削り(素材採取)→③全体の形を大まかに作る。粗削り(成形)→④内部の削り抜き→⑤細部調整・磨き(整形)→⑥仕上げ」の手順となる。加工痕跡から、鉢形容器は④の開始段階である。皿形容器は③表面成形→④内部削り抜き→③裏面成形の順が想定される。また、これまでの事例では楕円形容器の木取りは、素材の広い割れ面側を容器の上面にしている。鉢形容器のように広い割れ面を底部とする「逆」の横木取りは稀であり、類例は福島県荒屋敷遺跡にてトチノキの浅鉢未製品が1点確認されている。

木材を加工しやすくするには、材を安定させる(木材の水分を一定に保つ)ことが重要とされる。加工途中で材が乾燥した場合や加工を一次中断する場合には、一定の水分を与えて形状を安定させるため、水量の比較的安定した木組みの内部に置いて水漬けしていたことが考えられる。(杉野森)



図22 第3号木組遺構(4)

第5節 遺構外出土遺物

本節では、遺構外から出土した遺物に加え、古代以降の遺構から出土した縄文時代に帰属する遺物も併せて記載する。ただし、沢1・2、沢頭、第16号溝跡出土遺物については第6章で詳述する。

以下、土器、石器、土製品に分類してその概要を述べる。

1. 土器（図23～27）

遺構外からは約77kgの縄文土器が出土し、内85点を掲載した。ここでは、後世の流れ込みの可能性が高い平安時代の竪穴住居跡や、中・近世・時期不明の土坑・溝跡・井戸跡・ピットからの出土土器も併せて掲載した。遺構外出土の縄文土器は、第Ⅱ・Ⅲ層を主体として出土している。

分布をみると、A区西側の斜面からB区の沢1周辺、沢1以南にかけて出土し、中でも第7・9号竪穴住居跡や第131号土坑、B1-22グリッド付近にややまとまりがみられる。対して、A区東側の段差が生じるBQライン付近やB区北東部、平坦部であるC・D区からはほとんど出土していない。土層の堆積状況や遺構の検出状況からみても、A区東側からD区にかけては、その大半が後世に削平を受けていると考えられる。

出土した土器には、縄文時代前期から晩期まで時期幅がみられるが、その主体は後期のものである。文様や形態などから時期ごとに分類し、記述する。

縄文時代前期の土器（図23-2・26-5・8・9・27-3）

前期前葉から後葉のものが出土した。図26-5・8・9は前期前葉に相当する深鉢の口縁部破片である。直立気味または外反する口縁部となり、中でも図26-5は口唇付近で大きく外反する。地文は単節LRの横回転によって斜走縄文となり、S字状の結節回転文が多条に施される。図26-8の口唇には縄文の側面押圧によって等間隔に装飾が巡る。胎土はやや粗雑で、繊維が混入する。図26-8には補修孔が1個穿孔される。時期は円筒下層a式に相当すると考えられる。図26-5のように、白座式との関連が伺えるものもみられる。

図23-2は前期後葉に相当する深鉢の口縁部破片である。外反し、波状口縁を呈すると考えられる。口唇には棒状工具によって方形の刻み目列が巡る。口縁部外面には丸味を帯びた山形突起が付き、胴部には微隆帯が1条巡る。突起部には単節LRの側面押圧が、微隆帯には右方向からの方形の刺突列がそれぞれ施される。地文は、口縁部には単節LRによる側面押圧が施文され、胴部には無節Rの巻き方向をかえた短軸絡条帯第1A類が縦方向に施文される。時期は円筒下層d式に相当すると考えられる。図27-3は胎土に繊維が混入し、無節Rの短軸絡条帯第1A類を縦方向に施文した後に単節RLを縦方向に施文している。詳細な時期は不明だが、円筒下層式に相当すると考えられる。

縄文時代中期の土器（図23-1・3～5）

中期前葉から末葉のものが出土した。図23-1・3・4は中期前葉～中葉の深鉢の口縁部及び胴部破片である。図23-3は大型の山形突起の一部である。口縁部がやや肥厚し、隆帯文が施される。図23-1・4は口縁部付近で緩やかに外反しながら立ち上がる破片である。口縁部から胴部にかけては細い粘土紐の貼り付けによって隆帯文が施される。欠損しているが、丸味を帯びて外側に開く台形状の山形突起が4単位付くと考えられる。地文は、図23-3のように隆帯上や隆帯間に無節Lの側面押

圧や単節LRの馬蹄形押圧が施文されるもの、図23-1のように単節LR・RLの結束第1種によって羽状縄文となるものがある。図23-1の口縁部には破損部に沿うように補修孔が3個穿孔される。時期は、図23-3が円筒上層b式、1・4が円筒上層d式に相当すると考えられる。

図23-5は中期後葉～末葉の深鉢の胴部破片である。磨消縄文によって垂下文が施され、磨消部には刺突文が施される。時期は、最花式～大木10式並行に相当すると考えられる。

縄文時代後期の土器（図23-6～20、24-1～15、25-1～4・6～10・12～15、27-2）

後期初頭から後葉のものがみられ、中でも初頭から前葉のものが最も多い。図23-6～19・24-1・25-14は後期初頭のものである。出土した後期初頭の土器については、ここでは一括して取り扱い、土器型式については言及しない。出土したものの大半が深鉢の口縁部及び胴部破片である。波状口縁となるものが多く、図23-6～11のように隆帯文・刺突列・刻目目列が施されるものや、図23-14・15・25-14のように磨消縄文によってコ字状・クランク状などの方形文が施されるもの、図23-13・16・24-1のように折り返し口縁や微隆帯によって口縁部が肥厚し、磨消縄文によって三角形文が施されるもの、図23-17～19のように沈線文が施されるものがある。図23-9～11には円形の貼付の中央に刺突を施し、ボタン状となる突起が付き、図23-17～19には口縁部外面に丸味を帯びる瘤状の突起が付く。中には図23-12のように竹管状の工具によって環状の刺突文が施されるものもある。地文は単節RLや無節L・Rもみられるが、単節LRが大半を占める。縦回転によって斜走縄文となるものが多い。

図24-2～15・25-1・2・4・6・7・15・27-2は後期前葉のものである。深鉢・鉢・浅鉢・壺の口縁部・胴部・底部破片である。口縁部は図24-2～4の深鉢のように微隆帯によってやや肥厚する波状口縁となるものや、図24-11の浅鉢ように外面に沈線がめぐり平縁となるものがある。文様は沈線によってウロコ状を呈するもの（図24-2）や、弧線状文（図24-3・6・図25-2）・渦巻状文（図24-9）・方形文（図24-7・10）・波状入組文（図24-11～14・図25-1）など多様である。中には図24-5のように彫りの浅い櫛状工具によって三角形文が施されるものもある。壺の破片の中には、図25-4のように頸部が細くすばまり橋状の突起が付くものや、図25-6のように断面にヒゴ状工具によって切断痕がみられるものもある。地文は無地文となるものが大半である。中には図27-2のように格子状沈線文が施文されるものや、図24-14・15のように単節LRや無節Lの縄文地となるものもある。無地文のものにはミガキによって内外面が研磨され光沢を持つものもみられ、図24-8のように赤彩されるものもある。時期は十腰内I式に相当するものと考えられる。

図23-20・25-3・8～10・12・13は後期中葉～後葉に相当する深鉢・鉢・壺の口縁部破片である。後期中葉～後葉のものは、出土量が少なく、いずれも小破片である。図23-20のように隆帯によって口縁部が肥厚し、ミガキによって磨消縄文が施されるものや、図25-8のように無文帯を持つ波状口縁となり、胴部に平行沈線文が施されるものなどがみられる。時期は、図25-8・9が十腰内II式、図23-20・25-3・10・12・13が十腰内II～V式に相当すると考えられる。

縄文時代中期～後期の土器

（図24-16・17・25-5・11・19～23・26-1～4・6・7・10～13・27-1・4～12）

無地文・縄文地のみで時期判断が困難なものを一括した。無地文の壺・鉢がわずかにみられるが、その多くは縄文地の深鉢の破片である。深鉢の口縁部～胴部形態は、胴部付近から口縁部にかけて緩

やかに内反しながら立ち上がるもの(図25-19・20)、丸味を帯びて立ち上がるもの(図26-4・6・7)、緩やかに外傾しながら立ち上がるもの(図25-22・23・26-1～3・10～13)がみられる。緩やかに外傾しながら立ち上がるものの中には、口縁部付近で外側に屈曲するもの(図26-3・13)や折り返し口縁によって断面形が段状に張り出すもの(図26-10・11)もみられる。底部破片には図27-10のように底部外面に疋目痕がみられるものもあり、中には底部内外面にケズリによる調整痕がみられるものもある(図27-9)。地文は単節LRが多く、次いで単節RL、無節L・Rがみられる。縦回転や横回転によって斜走縄文となるものが大半を占め、斜走縄文の中にも複数の原体を撚り合わせることで異条・付加条となるものもある(図26-3)。単節LRの側面押圧が施文されるもの、単節L・RLの結束第2種が施文されるもの、無節Rの短軸絡条体が施文されるものもみられる。図26-4や27-6には補修孔が穿孔される。時期は縄文時代中期後葉～後期に相当すると考えられる。

縄文時代晩期の土器(図25-16～18)

晩期中葉から後葉のものがわずかにみられる。図25-16は鉢または浅鉢の口縁部破片である。口唇には彫込みによって二股に分かれる山形突起が付き、内外面には沈線によって三叉文が施される。図25-17は台付浅鉢・皿の台部と考えられる破片である。内外面にミガキが施され、外面下部には段差が見られる。図25-18は壺の胴部破片である。やや下膨れの形態を呈し、胴部上半には沈線によって工字文が施される。地文は無地文または単節LRの横回転によって斜走縄文となる。時期は大洞C2式～A式に相当すると考えられる。(澤田)

2. 石器(図28～30)

石器は、製品及び製品以外の二次調整の施されない剥片も含め、大半が第Ⅱ・Ⅲ層からの出土である。これらは基本層序第Ⅱ・Ⅲ層が良好に残存するBUIラインより西側の標高49～60mの斜面上から出土した。これより東側からは沢Iに伴うものを除き出土しなかった。このような出土状況は縄文土器と同様である。これはB～D区を中心として、中世以降のものと考えられる大規模な削平との関連が伺える。

今回の調査で遺構外から出土した石器は80点である。剥片石器では石鏃、石匙、石籠、スクレイパー類、礫石器では磨製石斧、磨石、敲石、石冠が出土した。この他に二次調整の施されない剥片が約200点出土した。

石材は剥片石器の大半が珪質頁岩製であるが、礫石器は安山岩、砂岩、粗粒玄武岩など多岐にわたる。ここでは、古代の住居跡及び中・近世のピットから出土したものも合わせて掲載し、器種ごとにその概要を述べる。計測値は観察表を参照されたい。

石鏃(図28-1～24)

24点出土した。無茎(1・2・4・5)、有茎(6・7・9～24)、円基(3)、尖基(8)に分類した。1は袂入部が作り出される凹基鏃である。2・4・5は平基鏃である。2は木葉形を呈する。6・7は基部を欠損するが、肩部の形状から凸基鏃と考えられる。16は鏃身が肩部から先端部にかけて極端に細くなっている。18は凹基鏃で袂りが深い。23は先端部を欠損するが、長さが63.7mmある大型のものである。20は未製品と考えられる。石材については、5は凝灰岩製であるが、他は全て珪質頁岩製

である。

石匙 (図28-25～29)

5点出土した。26・27・29は縦型、28は横型の石匙である。27は腹面右側縁に急角度の調整が施される。28のつまみ部にはアスファルトが付着する。25はつまみ部と考えられる。全て珪質頁岩製である。

石籠 (図28-30・31)

2点出土した。31はつまみを有し、先端が丸みを帯びる。いわゆる大石平型石籠と呼ばれるものである。いずれも珪質頁岩製である。

スクレイパー類 (図28-34・35)

不定形のもので、縁辺に連続した剥離を施すものである。2点を図示した。34は石匙の可能性も考えられる。35は腹面右側縁に連続した剥離が施され、刃部が形成されている。いずれも珪質頁岩製である。

不明 (図28-32・33)

破損品や未製品など、剥片石器の中でも器種を特定できないものを一括した。32・33はともに欠損しているが、石鏃の可能性もある。いずれも珪質頁岩製である。

磨製石斧 (図29-1～9)

12点出土し、9点を図示した。全て破損品である。1・4は刃部破片である。2・3・5～9は刃部を欠損する。いずれも基部に向かって細くなり、断面形は長方形及び楕円形である。石材は頁岩、安山岩、砂岩、粗粒玄武岩、花崗閃緑岩、緑色細粒凝灰岩、ホルンフェルスである。

敲石 (図29-10～14、図30-1・2)

6点図示した。一面及び複数面に敲打痕が見られるものである。10は両面に敲打痕が見られる。11も両面の複数箇所に敲打痕が見られる。石材は安山岩、砂岩、粗粒玄武岩である。

磨石 (図30-3～8)

6点図示した。側縁に磨り痕が見られるものが大半であるが、5は上面に磨り痕が見られる。6～8は磨り痕と敲打痕が見られるものである。10cm程度の円礫を用いており、いずれも磨り痕は側縁に見られる。7は敲打痕が複数面に見られる。石材は安山岩、砂岩である。

石冠 (図30-9)

1点出土した。破損品であるが、胴部に連続する敲打痕が帯状に巡ることから北海道式石冠と考えられる。側面には磨り痕が見られる。安山岩製である。

(葛城)

3. 土製品 (図27-13)

鐔形土製品が調査区西側BQ-33グリッド第Ⅱ層から1点出土した。つまみ部と胴部の一部が残存している。つまみ部には棒状工具によって穿孔される。文様は、つまみ部の付け根から胴部にかけて沈線文や刺突文が施される。時期は後期初頭～前葉に相当する。

(澤田)

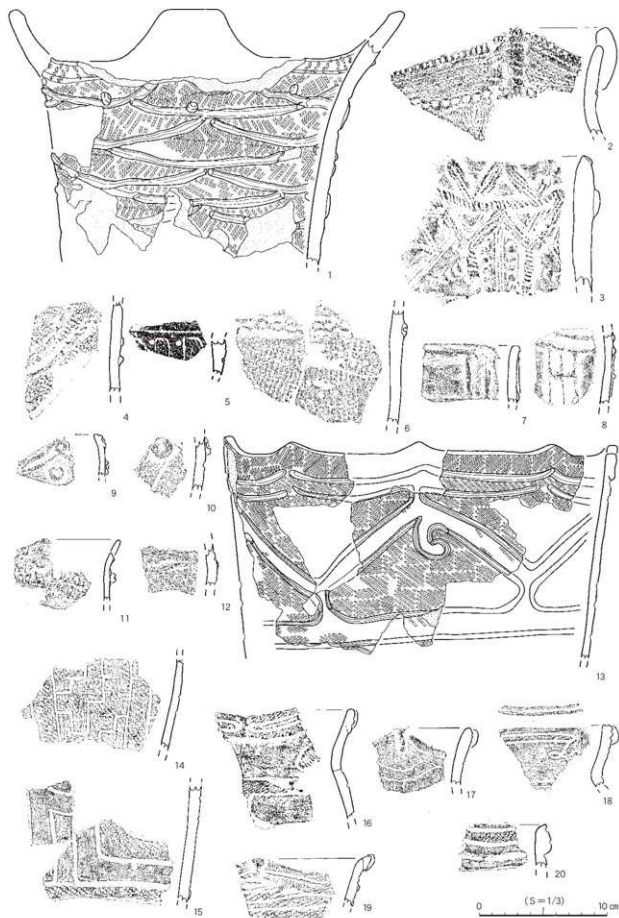


図23 縄文時代の遺構外出土遺物(1)

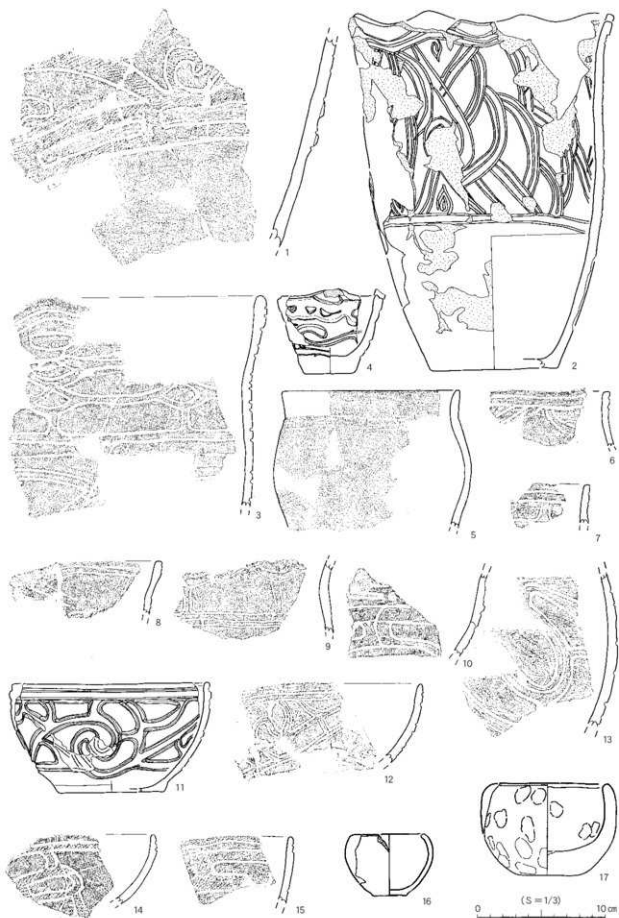


図24 縄文時代の遺構外出土遺物(2)

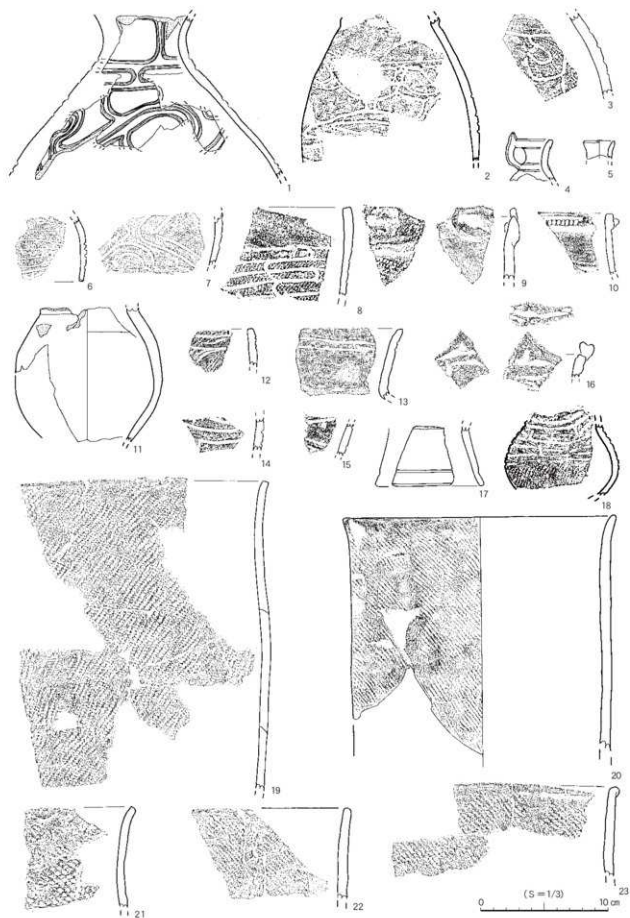


図25 縄文時代の遺構外出土遺物(3)

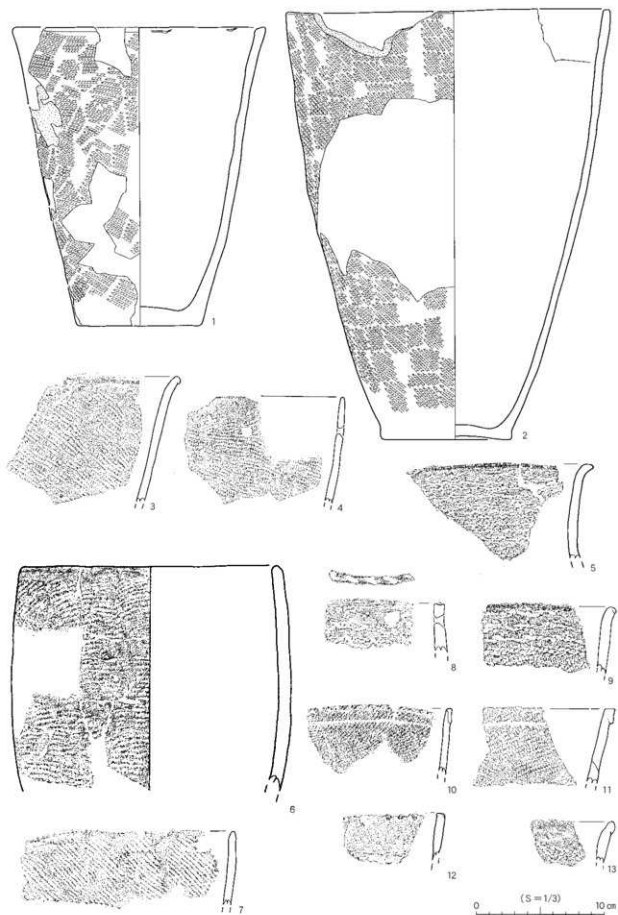


図26 縄文時代の遺構外出土遺物（4）

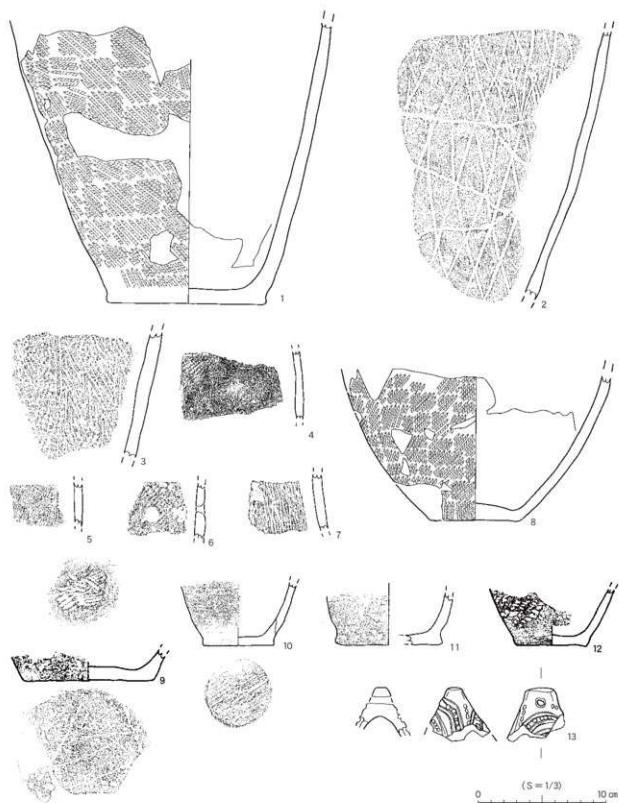


図27 縄文時代の遺構外出土遺物（5）

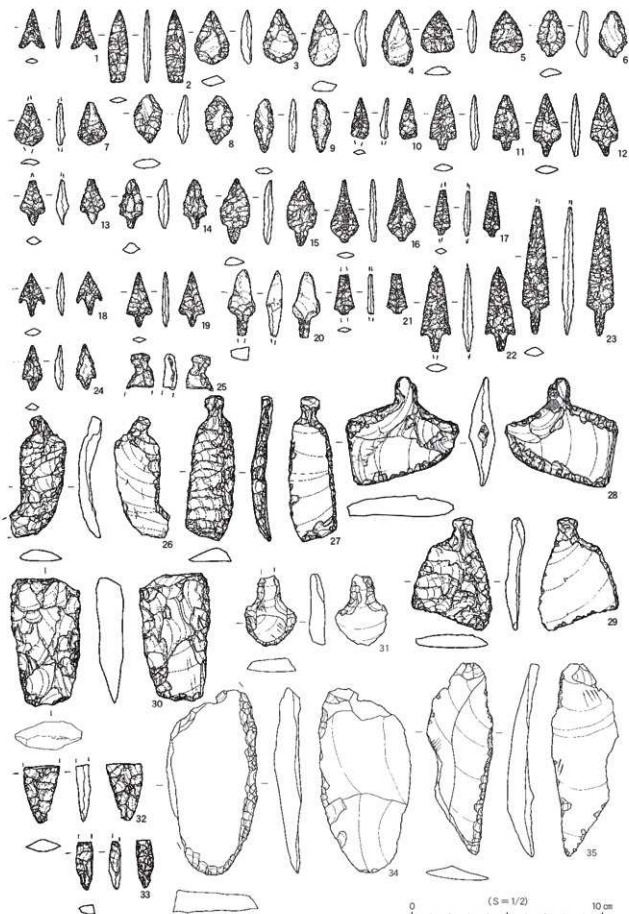


図28 縄文時代の遺構外出土遺物(6)



図29 縄文時代の遺構外出土遺物(7)



図30 縄文時代の遺構外出土遺物 (8)

第4章 弥生時代の検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡 (図31)

〔位置・確認〕 調査区南西端、BB-12グリッドを中心に位置する。第Ⅱ層除去後に黒色土の落ち込みとして確認した。南側は平成19年度調査で検出及び精査が行われている。今回の調査範囲は、前回調査時に未買収区域だった範囲である。

〔平面形・規模〕 斜面下方にあたる東側は失われている今回調査した範囲は残存長軸148cm、短軸459cm、床面積7.5㎡の範囲である。前回調査分と合わせた規模は長軸862cm、短軸600cmの楕円形を呈し、床面積は43.6㎡となる。

〔堆積土〕 6層に分層した。黒色土及び黒褐色土を主体とする。3層は炭化物層である。なお、前回調査で検出された埋没時に堆積したと考えられる火山灰層は、今回の調査では検出されなかった。また、BB-12グリッドを起点とする50cm四方の小グリッドを設定し、床面及び床面直上の土壌サンプルを採取した。分析結果については第8章第2節を参照されたい。

〔壁・床面〕 壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は79cmである。床面はほぼ平坦であるが、東側で斜面下方に傾斜している。

〔柱穴〕 27基検出された。主柱穴と考えられる大型のものではなく、大半が直径10cm前後の小型のものである。また、前回調査で指摘された3条のビット列は今回の調査でも確認できた。すなわち壁際から、ビット2-3-19を結びビット23に至る列、ビット4-7-1を結びビット13に至る列、ビット5-6-10-12を結ぶ列である。

〔炉〕 検出されなかった。

〔その他の施設〕 西壁で壁周溝を検出した。前回調査で検出されたものと連続するものであり、今回検出された規模は、幅7~22cm、長さ162cm、深さ29cmである。

〔出土遺物〕 堆積土中及び床面直上から甕、壺が出土した。1~7は甕の口縁部・胴部破片である。口縁部が外反し、頸部にミガキによる無文帯が巡る。口縁部形態は平縁となるもの(1)、平縁に平行沈線が巡るもの(4・5)、波状口縁となり、沈線が外面に巡るもの(2・3)がある。2には口唇に二山の突起が施され、内面に2条の沈線が巡る。胴部には単筋R.Lが施され、縦走縄文となるもの(1)、斜走縄文となるもの(6・7)がある。6には平行沈線文が施され、7には平行沈線と2段の刺突列が巡る。4・5は同一個体と考えられ、壺の口縁部である可能性もある。8は鉢または浅鉢である。外面にはミガキの後、変形工字文が施される。9は壺の口縁部~頸部破片である。調整はやや荒く、無地文となり、口唇付近には対応するように2個の穿孔がみられる。破損した痕がみられないことから、紐などを通すために用いられたのであろう。付着物をみると、甕である1~7には内外面にススが付着している。中には内面に内容物のコゲがみられるもの(3)もある。しかし、2・8のように外面に赤色顔料が塗布されるものにもススがみられることから、住居の焼失に伴って被熱した可能性が高い。

時期は弥生時代前期~中期の馬場野Ⅱ式~大石平Ⅵ式に相当すると考えられる。中には6のように二枚橋式との関連性が伺われるものも出土している。前年度調査の出土遺物と比べると、弥生時代中期後葉の遺物はみられないものの、主体となる出土遺物の帰属時期は大きく矛盾しない。

〔小結〕 出土遺物及び堆積土の状況から、弥生時代中期の焼失住居と考えられる。

(葛城)

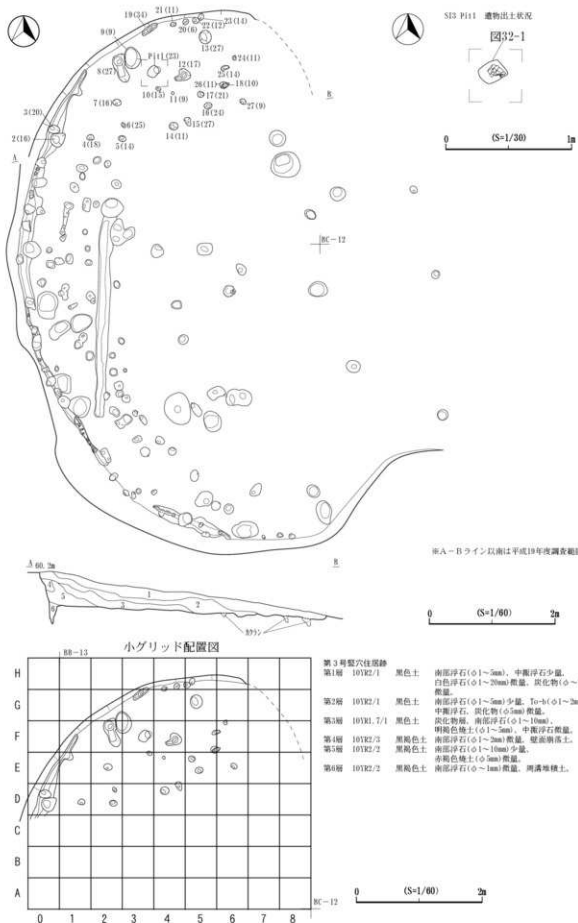


図31 第3号竪穴住居跡(1)

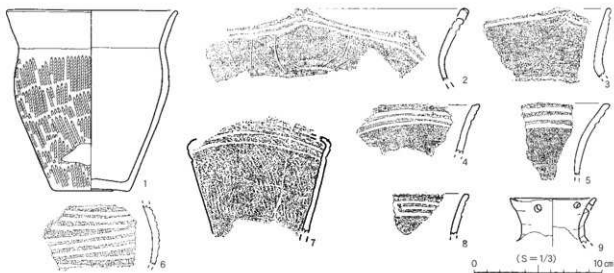


図32 第3号竪穴住居跡(2)

第2節 遺構外出土遺物(図33)

弥生土器はA区南西側のBC-14・BE-12グリッドなどの急斜面から出土した。多くが小破片であったため、残存部位の特徴から甕、鉢、浅鉢・高坏、壺に分類して掲載した。

1～10は肩部が丸みを帯びる甕の破片で、口縁部が外反し、無文帯を持つものが主体となる。口縁部に単節RLの縦走または斜走縄文が施され、平行沈線が巡るもの(1・2)、肩部に平行沈線が巡るもの(4・6～10)がある。11～13はやや丸みを帯びて外傾する甕の口縁部破片である。口唇には縄文による回転押圧が施され、外面と内面には交互に刻み目列が巡る。二山状の突起が等間隔に配置されるようである。口縁部外面には沈線と連弧状文が描かれる。文様と対応するように穿孔されるもの(11)、内外面に楕円形の押圧が交互に巡る口唇装飾となり、口縁部外面にやや崩れた平行沈線が巡るもの(13)もある。地文は単節RLによる斜走縄文となるが、条痕地となるもの(12)もある。15～19は甕の頸部付近の破片で、同一個体の可能性も考えられる。無地文部に平行沈線文や交互刺突文が施される。24～26はいずれも小破片で器形は判然としないが、鉢と考えられるものである。24は胴部破片で、単節RL・LRによって羽状縄文が施文され、磨消縄文が施される。25は平縁となる口縁部で、口唇に突起が付き、口縁部内外面には2条の平行沈線が巡る。26は口唇に彫り込みが施され、平行沈線と3段の刺突列が巡る。20は波状口縁となる浅鉢または高坏である。底部付近ですばまり、台部を伴う可能性が高い。胴部はミガキによって無地文となり、変形工字文と考えられる文様が施される。21は波状口縁となる高坏の口縁部で、内外面に沈線が巡る。胴部外面には単節LRによって斜走または横走縄文が施文され、磨消縄文によって楕円形の文様が施される。22・23は高坏の台部と考えられる。磨消縄文によって楕円形の文様が施され、22には刺突列が巡る。27・28は同一個体である壺の胴部破片である。0段多条の単節RLによる斜走縄文が施文され、沈線や磨消縄文によって工字状の文様が施される。29は口縁部を欠く壺で、頸部に隆帯・単沈線が巡る。胴部には単節RLの縦回転によって縦走縄文となり、平行沈線・刺突と鋸歯状沈線文が描かれる。ススは主に甕にみられ、4・13には一部コゲが付着する。浅鉢・高坏である21・23には縄文地部分に赤色顔料が塗布される。時期は弥生時代前期後葉～中期前葉である馬場野Ⅱ式～大石平Ⅵ式に相当するもの(1～10・20～25・27・28)、中期後葉～後期前葉である念仏間式～天王山式に相当するもの(11～19・26・29)がみられる。

(澤田)

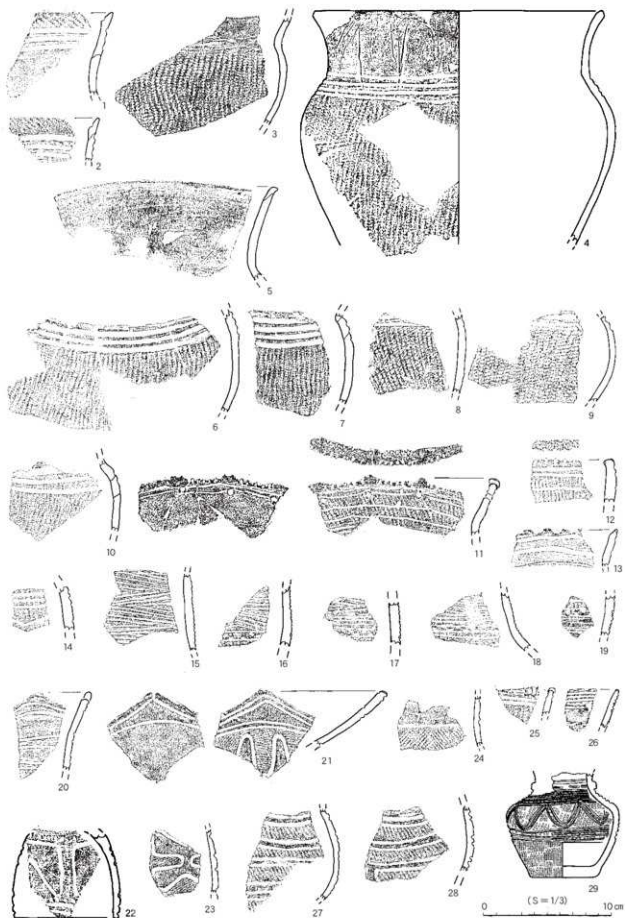


図33 弥生時代の遺構外出土遺物

第5章 古代の検出遺構と出土遺物

第1節 竪穴住居跡

古代の竪穴住居跡は4軒検出された。遺構の時期については、出土遺物及び火山灰の堆積状況などから10世紀前半以前のもものとそれ以降のものに大別できる。以下、遺構ごとに述べる。

第12号竪穴住居跡(図34)

〔位置・確認〕BP-35グリッドを中心に位置する。第1層除去後に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔平面形・規模〕残存長軸395cm、残存短軸130cmである。平面形は方形を呈すると考えられるが、西側は調査不能区域のため全体形は不明である。残存床面積は3㎡である。

〔堆積土〕4層に分層した。黒色土を主体とする。2層にはB-Tmが層状に、3層にはT_o-aがブロック状にそれぞれ堆積する。いずれも自然堆積と考えられる。また、床面直上には炭化物及び焼土が広がりをもって検出された。

〔壁・床面〕残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は53cmである。床面はほぼ平坦である。また、ピット1の周辺からは貼床が検出された。

〔柱穴〕1基検出された。長軸32cm、短軸22cmの楕円形を呈し、深さは7cmである。

〔カマド〕検出されなかった。

〔その他の施設〕土坑を1基検出した。平面形は長軸46cm、短軸36cmの楕円形を呈し、深さは38cmである。規模などから柱穴の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕図示しなかったが、堆積土中から土師器製の小片が出土している。

〔小結〕本住居跡は炭化物の検出状況から焼失住居と考えられる。またB-Tmが層状に堆積していることから、10世紀前半には廃絶されたものと考えられる。

(葛城)

第13号竪穴住居跡(図35・36)

〔位置・確認〕BK-26グリッドを中心に位置する。第Ⅲ層調査時に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕カマドの煙出部が縄文時代の第116号土坑と重複し、本住居跡が新しい。

〔平面形・規模〕長軸466cm、短軸458cmである。平面形は方形を呈する。推定床面積は19.5㎡である。

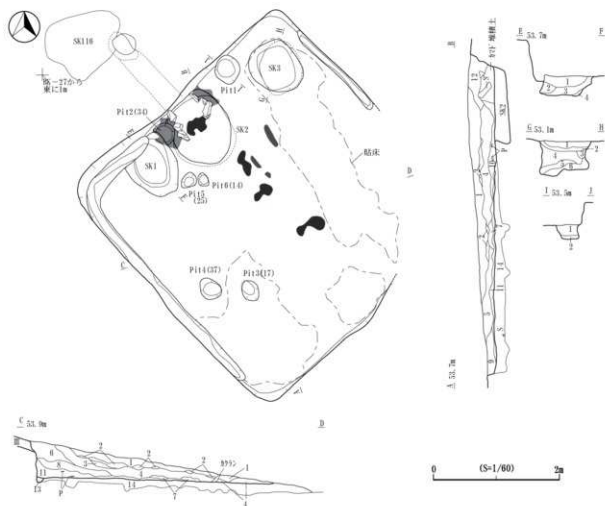
〔堆積土〕14層に分層した。黒色土を主体とする。2層にはB-Tm及びT_o-aがまとまって堆積している。3層にはB-Tmが少量混入する。B-Tm及びT_o-aは、住居内北西側に広がりをもって堆積していることから、自然堆積と考えられる。床面直上には少量だが炭化物や焼土、粘土塊が検出された。13・14層はそれぞれ壁溝・掘方の堆積土である。

〔壁・床面〕壁面は緩やかに外傾しながら立ち上がる。最大壁高は北東側で、75cmとなる。床面はほぼ平坦で、中央付近を除く大部分から白色ロームと黒褐色土との混合土による貼床が検出された。

〔柱穴〕6基検出された。楕円形を呈し、北側・南西側から検出されたが、柱穴配置などは不明である。

〔壁溝〕幅11～24cm、深さ7～15cmとなる。東壁側で浅く、西壁側で深くなっている。

〔カマド〕北西壁の中央付近から1基検出された。火床面、袖の一部、地下式の煙道及び煙出部が検出された。



遺物出土状況

火山灰・粘土範囲

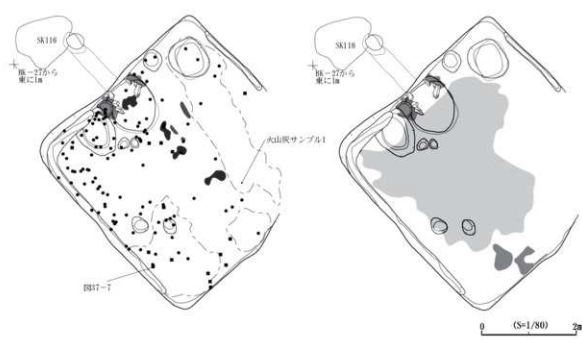


図35 第13号竪穴住居跡(1)

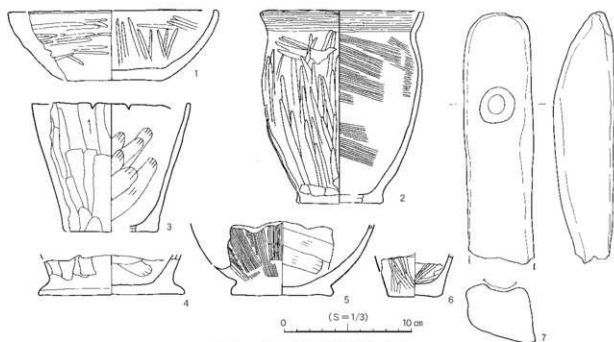


図37 第13号竪穴住居跡(3)

第14号竪穴住居跡(図38)

〔位置・確認〕 CE-26・27グリッドに位置する。第V層調査時に黒色土の落ち込みとして確認した。

〔重複〕 西壁が時期不明の第117号土坑と重複し、本住居跡が古い。

〔平面形・規模〕 長軸199cm、短軸175cmである。残存状態から平面形は方形を呈すると考えられる。推定床面積は3.2㎡である。

〔堆積土〕 3層に分層した。黒色土である1層が主体となる。1層にはB-Tm及びTo-aがブロック状に堆積し、検出状況から人為堆積と考えられる。3層は掘方の堆積土である。

〔壁・床面〕 緩やかに外傾しながら立ち上がる。壁高は37cmだが、残存状態が良好ではなく、東側からは壁面の立ち上がりはほとんど確認されなかった。床面はほぼ平坦となるが、東側は削平によってほとんど残存していない。

〔カマド〕 検出されなかった。西壁を中心に長軸79cm、短軸68cmの不整形の焼土が検出されたが、堆積状況などから火床面の可能性は低い。

〔出土遺物〕 図示しなかったが、堆積土中から土師器小破片が出土した。

〔小結〕 住居跡内からはB-Tm及びTo-aがブロック状に検出されたが、堆積状況などから土師器などの小破片とともに廃棄されたものと考えられる。焼土についても範囲が判然としなため同様である可能性が高い。B-Tm及びTo-aの検出状況などから10世紀後半火山灰降下以降のものと考えられる。

(澤田)

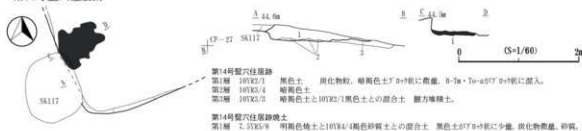
第17号竪穴住居跡(図38)

〔位置・確認〕 BF-25グリッド付近に位置する。第IV層調査時に黒色土の落ち込みとして確認した。

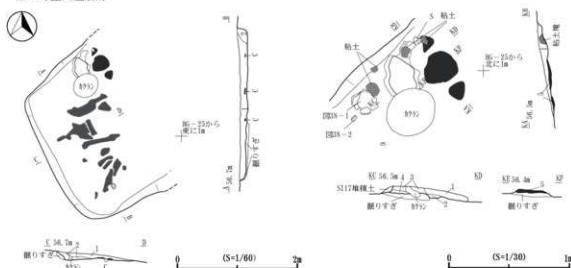
〔平面形・規模〕 残存長軸258cm、残存短軸212cmである。残存状態から平面形は方形を呈すると考えられる。残存床面積は5.1㎡である。

〔堆積土〕 2層に分層した。黒褐色土・黒色土となる。1層が主体となり、2層は壁際に一部堆積していた。

第14号竪穴住居跡



第17号竪穴住居跡



第17号竪穴住居跡

- 第1層 10Y2/1 黒色土 明褐色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、炭化物($\phi 1\sim 2mm$)、灰白色浮石($\phi 1\sim 2mm$)少量。
 第2層 10Y2/2 黒褐色土 黄褐色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、灰白色浮石($\phi \sim 1mm$)少量。
 第17号竪穴住居跡方子
 第1層 10Y2/4 暗褐色土 明褐色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、灰白色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、炭化物($\phi 1\sim 2mm$)少量、砂礫土。
 第2層 10Y2/2 黒褐色土 灰白色土0-1粒($\phi \sim 1mm$)、明褐色土0-1粒($\phi \sim 1mm$)少量、砂礫土。
 第3層 10Y2/8 黄褐色粘土 灰白色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、炭化物($\phi 1\sim 2mm$)少量、砂礫土。
 第4層 10Y2/5 暗褐色土 黄褐色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、炭化物($\phi \sim 1mm$)少量。
 第1層 7.5Y2/8 明褐色粘土 黒褐色土少量、黄褐色土0-1粒($\phi 1\sim 2mm$)、炭化物($\phi 1\sim 2mm$)少量、火床面。

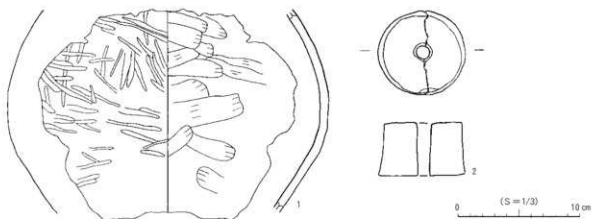


図38 第14・17号竪穴住居跡

床面直上には炭化物が広がりをもって検出された。

〔壁・床面〕 残存する壁は直立気味に外側へと立ち上がる。壁高は33cmだが、多くが削平されており、残存するのは西壁と南北壁の一部である。床面はほぼ平坦である。

〔カマド〕 北壁から1基検出された。火床面、袖部の一部が検出されたが残存状態はよくない。火床面は長軸30cm、短軸26cmの円形である。袖部は粘土で構築されている。軸方向はN-31°-Wである。

〔出土遺物〕 床面直上から土師器甕及び土製品が出土した。図38-1は球罌甕、2は土製紡錘車である。

〔小結〕 出土遺物から 8 世紀代の焼失住居と考えられる。

(澤田)

第2節 遺構外出土遺物

古代の遺構外出土遺物は489点、4751.8g 出土した。土師器が主体を占め、須恵器はわずかに甕の胴部破片が1点、他は掲載した土・石製品である。これらの大半は調査区西側のA区から出土し、B区より東側からはほとんど出土しなかった。おおよそ奈良、平安時代のもと考えられる。

1は土師器甕の胴部破片である。胴部上半は外面ハケメ、内面ミガキが施される。奈良時代のもと考えられる。2は土師器甕の底部破片である。外面ケズリ、内面ナデ、外底面にはミガキが施され木葉痕が確認できる。3は土師器鉢の胴部破片である。胴部の内外面ともにナデが施される。平安時代のもと考えられる。4は土製紡錘車、5は中央に穿孔が施される頁岩製の石製品である。6は3面を砥面とする砥石である。7は石製装身具である。破損部には縦位に穿孔が施されるが、欠損しているため、全体形は不明である。丁寧に研磨されており、中世以降のものである可能性も考えられる。

(葛城)



図39 古代の遺構外出土遺物

第6章 中・近世の検出遺構と出土遺物

第1節 掘立柱建物跡・ピット

[復元の経緯]

本調査で検出されたピットは1850基である。検出層位および共伴遺物から、ピット群の成立年代は中世末以降を主体とすると考えられる。調査期間中は柱穴列の想定を行うなど掘り残しがないよう努めた。本報告書記載の復元案は、調査終了後に作られた遺構配置図をもとに、元八戸工業大学教授高島成佑氏が作成したものである。建物跡の基本情報は次頁表1、柱穴・ピット内の出土遺物の情報は巻末の遺物観察表に示した。復元建物の詳細に関しては高島氏の考察に譲る（第8章第4節）。

[遺構検出状況]（図40）

復元作業の結果、12棟の掘立柱建物跡が確認された。検出地点はB区7棟、C区3棟、D区2棟である。ピットはB区北西部からD区北部の範囲で集中して検出された。この範囲は中・近世遺物・遺構の集中範囲でもあり、当該期の居住域はB区以東の範囲を主体としたと考えられる。同範囲は全体に基本層序第Ⅱ層以下が欠如しており、広範囲に及ぶ削平が想定される（第7章第2節）。範囲内には削平によって造成されたと考えられる東西20～25m幅の平場が50cm程度の高低差を持って複数存在する。調査区内では、1. B区西部CラインからB区中央CHライン、2. 同CHラインからB区東端、3. C区西端からD区西部CYライン、4. D区中央以東の四枚の平場が確認できた。このうち建物およびピットは1と3に集中し、2と4は空閑地の様相を呈す。当該期においても平場の利用方法に差異がみられたと考えられる。なお、掘立柱建物は全て一段ごとの平場範囲に収まるように計画されている。平場の成立年代と建物の使用年代が同時期であったことを示すとともに、建物の設計者が平場を区画単位と認識していた可能性を示唆する。また、平場境には浅い溝（第13・14・19・20号溝跡）や植栽列（CHライン付近に現存する木根）などの境界装置が配置された可能性が高い。

[間尺から推定される建物跡の推定年代]（図41・42）

B区検出の7棟（第1～7号掘立柱建物跡）の主要柱間寸法は7.0～6.5尺であり、間尺から推定される成立年代は15世紀後半から17世紀前半となる。C・D区検出の5棟（第8～12号掘立柱建物跡）の主要柱間寸法は8.0～6.0尺であり、間尺から推定される成立年代は17世紀以降となる。

[間取りから推定される建物跡の用途]

第1号掘立柱建物跡は、三間×三間の母屋に南正面の三面庇がめぐる平面を持つ。間取りの類似性から比定すると、用途には三間堂仏堂が想起される。第1号掘立柱建物跡を除く、建物の用途には住居（第4・8号掘立柱建物跡）や倉庫（第3・5・6号掘立柱建物跡）が想定できる。なお、梁間二間以上の建物でも間取りに明確な特徴がみられない建物跡（第2・9・10号掘立柱建物跡）や梁間一間の建物跡（第7・11・12号建物跡）の用途は不明である。

[寸法表記]（第8章第4節 図1・2）

第8章第4節図1・2における柱間寸法は、mm表記と尺寸表記を併記している。このうちmm表記は当該柱穴下端中心間の実測値を示し、尺寸法は復元建物の間取りから仮定された当時の部材長の推定値を示す。よって必ずしも両寸法は一致しない。両寸法はともに高島氏が試算計測を行った。（中村）

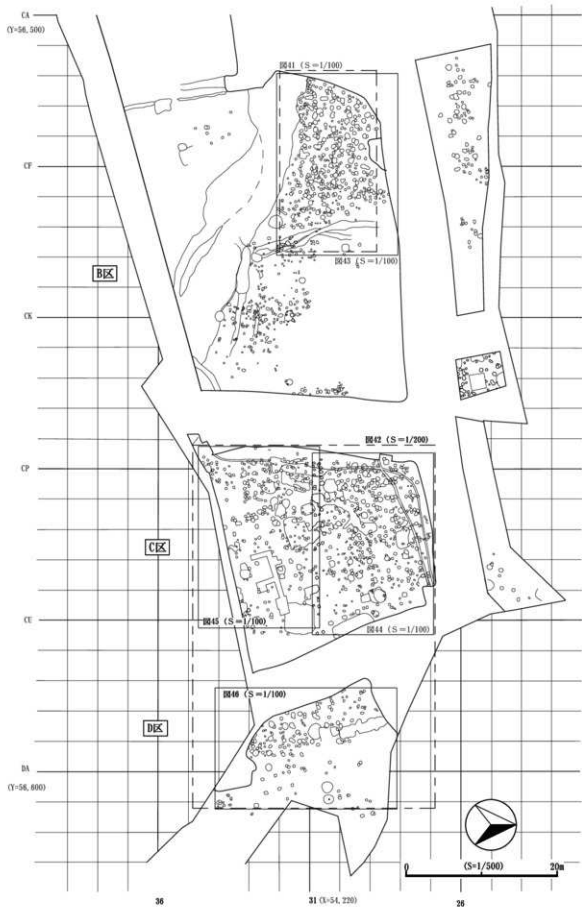


図40 掘立柱建物跡配置図・ビット集中区位置図

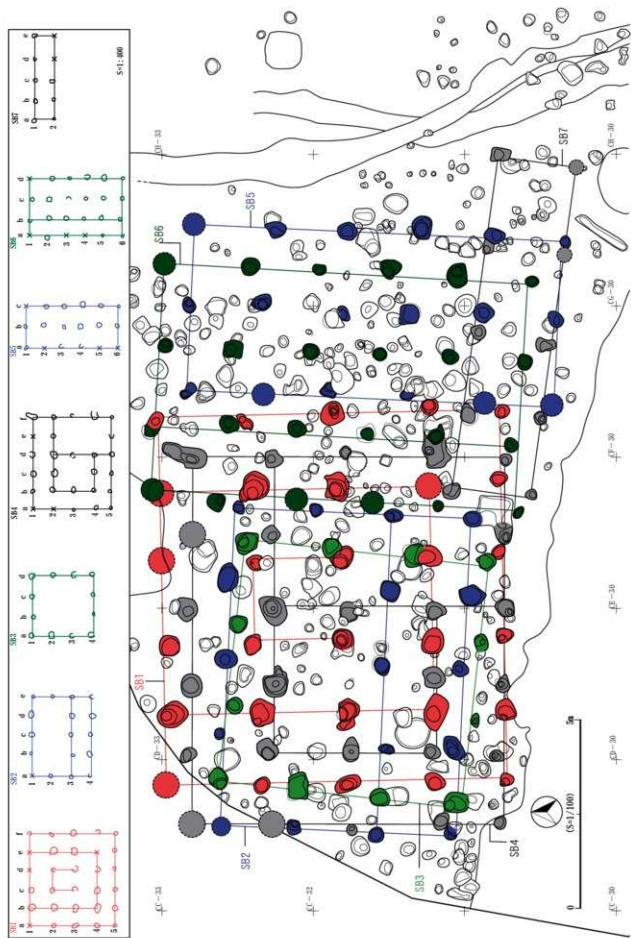


図41 B区掘立柱建物跡配置図